
転生しちゃいました。

池中織奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生しちゃいました。

【Nコード】

N1828T

【作者名】

池中織奈

【あらすじ】

最近よんでる、転生物。

死んだ主人公が転生して色々やってる話です。

他サイトでも小説書いてるけど、そっちでは携帯小説として書いている、というか、読者が十代が多いから読者に読みやすいように書いてたので、このサイトを知って、書きたくなった。

一応、ラノベ作家になりたいけど、文章力は皆無です…。文章力な

いけど、中傷、批判はやめてくださると助かります。批評なら全然いいです

最近作者は鬱気味なので、気晴らしにちょっと書きたくなりました。

プロローグ

目が覚める。視界が歪んでいて、何が何か、わからない。
此処は何処だろう？

ぼんやりとした視界の中で、私は考える。

「

誰かが、理解できない言葉を吐いている。

何処の言葉だろうか、それが理解できない、言葉。

私の意識は此処にある。

だけど、思うように体を動かせない。

視界は歪んでいる。

記憶を思い返してみれば、最後に見たのは、車のクラクション。
ブレイキの音と共に、私の体は痛みに襲われたのだ。

ああ、もしかして私は死んだのだろうか？

五歳の出会い（前書き）

魔法の呪文を考えるのは難しい…

五歳の出会い

「アリア」

お母様の優しい声が響いて、私は瞳を開けた。

目の前には、”今の”お母様が居る。金髪碧眼のお母様に似て、私もその色を持っている。

私は、シューベルト家に長女として生まれた。

非常に不可解な事だが、私は生前は日本という国で、高校生をしていた。特にとりえもなく、平凡で、ただ彼氏が居て幸せだった日々。

彼氏に裏切られて、私はそのまま死んだのだ。

「お母様、おはようございます」

「おはよう、アリア」

にこやかに笑うお母様の笑みに、安心する。

今日は上のお兄様が、学園から帰ってくる日だった。

だから、早めに起きて、ソファに座って待っていたのだが、どうやら私は眠ってしまったらしい。

眠くて、目をこする。昨日遅くまで、お父様の部屋に置いてある魔法書を読みあさっていたのが、悪かったのかもしれない。

この世界には、魔法が存在するのだ。前の世界では、存在しなかった、その力が、この世界には存在している。

私はそれを知った時、どれだけ興奮したことか！

前世の頃、私はファンタジーが好きだった。天使や、神様なんかより、魔王とか、幻獣とか、そっちの方が好きだった。この世界には魔物が居るというのだ。

もしかしたら生で、私が今まで物語の世界で好きだった生物達に会えるかもしれない。私は将来、冒険したい。お母様やお父様、お兄様には反対されるだろうけれども。

この、自然溢れる、昔とは違う世界を見ていきたい。そう、思っ

てるから文字を習って、魔法書を読んだり色々している。

しばらくのんびりとソファに座っていれば、屋敷の外があわただしくなった。お兄様が帰ってきたらしい。

私の今の家は貴族だから、家に仕えるメイドさん達が、私の手を引く。

玄関から、お兄様が入ってきた。

お兄様は、お父様の髪の色である黒と、お母様の目の色である碧を受け継いだ、美少年だ。今年十二歳になる、お兄様は剣技の才能にあふれている。

「ただいま」

お兄様が笑って、そう言った。

「おかえりなさい、お兄様」

そう言って、私が笑えば、お兄様は、私を抱きしめてくれた。

前世では、私に家族愛も何もなかった。家族が、何かよくわからなくて、両親に嫌悪を覚えていた。だから、今の家族が、大切だと思っ。

愛される、そう実感する度に私は幸せをかんじて、嬉しくなってしまう。

「ネル、おかえりなさい。」

学園の話をしてちょうだい」

お母様が、そう言って、お兄様は頷いた。

それから、私とお母様はお兄様に学園の話聞いた。

携帯小説とかでもよんだ、魔法学園。それがこの世界には実在するのだ。この世界には戦いが溢れる。そして、科学は発達してい

ない。

私は、科学より、魔法の方が好き。

夢見がちだつて言われるかもしれないけど、前世の頃から空を飛びたいとか、攻撃系魔法を使いたい、とか、ドラゴンと友達になりたいとかそんな願望に溢れていた。

「十三歳になったら、ギルドで実習があるんだ」

お兄様が、笑って言う。

ギルド、という単語に思わず、興奮してしまう。

私も、早く、大きくなりたい。そうすれば、夢にまで見た魔法学園に通えるのだ。

それから、お兄様に沢山のお話を聞いた。お兄様の友人の話や、学園の教師の話、魔法の授業の話。

学園には六歳から通う事が出来る。私も来年からは、学園に通えるのだ。ああ、貴族として転生させてくださった、神様に感謝だ。神様なんて信じちゃ、いないけどそう思った。

「私も、学園に早くいきたい!!」

思わず声に出して、そう言ってしまった。

お兄様とお母様とのお話が終わって、私は屋敷を抜け出す。実はというと、魔法を私はもう使える。魔法書に書いてあった呪文。それを理解する事と、イメージする事が、魔法を扱うのに大切な事なのだ。

術式は、前世の記憶があれば、ある程度理解できた。

私の部屋は二階で、裏庭は森だ。その森へと向かうのだ。

二階の窓を開けて、呪文を唱える。

「

望むは翼。求めるは純白。

白き翼は空を駆け、白き翼は舞い上がる。

羽ばたきを願い、風を願う。

我、魂へと呼応せよ。

《ウイングバード》」

呪文を口にすると同時に、心臓がドクンツと震えた。

魔力が体中を駆け廻り、魔法の情報の刻まれた術式が空を舞う。

体からあふれ出た、術式は私の背中へと移動していき、翼を生み出す。

鏡の前に立つと、笑みがこぼれる。真っ白な翼。風属性が生み出した、飛行魔法。

空を飛ぶ事にあこがれていた私は、魔法書に描かれていたそれをすぐさま習得した。もちろん、最初から出来たわけではない。魔法書とにらみ合つて、私は理解したのだ。その、魔法を。

きよるきよるとあたりを見回して、誰もいない事を確認すると、私は翼をはばたかせて、地面へと舞い降りた。

そして、すぐさま、翼を消す。

「《解除》」

ただその一言で、翼は散った。

翼に刻まれた術式は、自然へと帰っていく。

森の方へと、私は歩みを進める。自然が溢れる森の空気は澄んでいた。

屋敷から見えないあたりに、立ち、私は魔法を発動させるために、言葉を紡ぐ。

「 我、渴望するは、紅蓮の炎。

《ファイア》」

まずは、手慣らしに、簡単な魔法を発動させる。イメージ通りに、手に小さな炎がつく。

それを確認すると、私は、ふうと息を吐いた。そして、口を開く。

「 求めるは赤。願うは紅。

赤きモノ、紅きモノ。

我、熱さを願い、光を願う」

イメージする、大きな大きな炎を。

「 我、魂に、赤き、紅き刻印を刻め。

《フレイムピュラー》」

現れるは、赤い、柱。円柱状の、紅い、柱。

溢れだした術式が、それを形成していく。

高さはそこまでないけれども、発動できた事にテンションが上がってしまう。

「 やった!!」

一昨日、術式がうまくいってなかったのか、発動できなかった、魔法。それを発動できたのだ。嬉しくなるのは、当然だった。

「 《解除》」

そう呟くと同時に魔法は消える。

《解除》とは術式を崩壊させる事。魔法書には解除の事なんて書いてなかったけれど、見えている術式を魔力によっていじってやれば、それで魔法は《解除》できる、という事に私は去年気付いた。別に《解除》と呟く必要はない、ただのかっこつけで、《解除》といっているだけである。

そんな事をしていたら、ガサツという、音が聞こえた。

やばいつ、誰かいた？

それを思っ、音のした方を振り向けば、一人の少年が居た。

「 っ」

その姿を見て、私は驚く。その姿はボロボロだった。服は所々穴があいていた、服の隙間から見える肌には火傷のあとまである。

「だ、大丈夫？」

声をかけても、少年は何もいわない。私は心配になって、少年に近づく。そうしてるうちに、ドサツと少年は崩れ落ちるように、地面に倒れた。

「え、ちょ！えーと、えーと！」

そうだ！お兄様とお母様呼んでくるから、我慢してね！」

私はそう言っつて、慌てて、家へと戻った。

お母様とお兄様は私が抜け出したの知らなくて驚いてたけど、ボロボロの彼の事を話すと、慌てて森へときてくれた。

その少年は身元を話さなかった。だけど、帰る家はない、といった。

そんな少年に、お母様はいった。

「此処に住んでいいわよ」

と、そんな優しい言葉を。

私もそれに賛成だった。見るからに私と同じ年ぐらいの少年であるし、このまま放置するわけにもいかない。

彼は、名前をいわなかった。名前がないわけではないみたいだけど、その名前を言いたくないようだった。だから、私がつけた。

「君、黒い髪に、黒い瞳だから、クロって呼びたい、私。

クロって愛称で呼べる名前……だから、クロスでどう？」

そう言ったら、その少年は笑ってくれた。

それが、私とクロスとの出会いだっつた。

学園入学（前書き）

学園入学。

ちなみに、アリアの攻撃魔法ぶっぱなちたいだの、ドラゴンと友達になりたいだのは、作者の願望です。

変更箇所は武器選択の部分と、矛盾点です。

（武器選択を変更するため、これより後の章がよくわからないごちゃごちゃになっているのをご了承ください。全て変更したら、きちんと報告します）

それと体力づくりについて。

学園入学

私とクロは、馬車に揺られている。

お母様やお父様、お兄様は居ない。ただ、案内してくれる使用人だけがそこに居る。

空は晴天だった。こんな日に、空を飛べたら気持ち良いだろうなと思う。

私とクロは今年六歳になる。だから、魔法学園に通えるのだ。世界に魔力を持っていない人間は居ない。魔法がつかえない人間は居ない。

私とクロは出会ってから、お母様達に隠れてこっそりと魔法の練習をしていた。学園に向かう前に、お父様の部屋で見つけた書物に魔法の制御について書かれてた本を発見したので、お父様に頼み込んで、本を譲ってもらった。

もっと早くに書物の存在に気付いていれば、もっと昔から魔力の制御の練習が出来たかもしれない、と私はもっとよくお父様の書斎をよく見とけばよかったと後悔したものだ。最初はクロは魔法学園にいく事を渋っていた。理由はわからないけど、私の家に住む前が、関係しているのかもしれない、と、直感で感じた。

まあ、私がクロも一緒に学園に行きたいと思って説得したらいくといってくれたのだ。

そういえば、クロと魔法の練習をしていて気がついた事だが、クロには、魔法を発動するとき体から溢れる術式が見えないらしい。初めて聞いた時はそれはもう、驚いて、お母様にもさりげなく聞いてみたものだ。で、聞いてみてわかったのだが、私以外に術式を見る、という行為はできないらしい。それで、私が簡単にやっている《解除》だが、私は、術式を一部組み替えて魔法を消す。だけど普通は発動された魔法に魔力を込めて術式なんて関係なしに、力任せにいじって消すらしい。

それを知った時驚いた。でも、それと同時に嬉しかった。だって、チート能力だよ、これ！

もしかしたら、この術式を見る、には名称があって、他にも見れる人いるかもしれないけど、なんか目の能力としてさ。でも、チートだよな。

私の《解除》と、皆のする消すでは、使う魔力の量が違うらしい。普通の人がある、消すは、無理に魔力を込めて消すのだ。私の《解除》より魔力を使う。

「クロ、学園楽しみだね」

「うん」

クロは頷いてくれた。

クロは、どちらかというと、女顔だ。普通にして黙っていれば、女だ間違われても仕方のない顔立ちをしている。目は丸々と大きくて、唇はぷっくりとしている。肌も白くて、女の私よりも可愛いんじゃないか、なんて思う。

そうやって、クロと学園について会話をしていれば、馬車が止まった。魔法学園に到着したのだ。

国立アルフォード魔法学園。

私の住む、ゼラフ大陸にある大国、シリウスで一番大きい学園だ。6歳から、12歳までが初等部。13歳から、15歳までが中等部。この世界の成人は早くて15歳で成人だ。だけど学びたい人は、16歳から18歳までが通う高等部に通う事が出来る。

もつと学びたい人は、研究員として研究する事もできるのだ。

「わお、大きい」

はじめて目にした魔法学園はそれはもう、大きかった。流石は、国一の学園というべきか、その大きさに私もクロも圧巻されていた。

校門をくぐれば、案内役だろうか、背の高い先輩が、立っていた。その茶髪の女性は、いう。

「新入生？　なら、体育館に向かってね」

そう言って、その先輩はにこやかに笑って体育館の場所を教えてくださいました。

クロと一緒に体育館へと向かう。

心臓が緊張で高鳴る。幾ら、精神年齢が20歳だからといっても初めての場所は緊張するものである。ちらりと隣を見るが、クロはどうやら緊張も何もしてないらしい。

何だか、負けた気分だ。前世の記憶も合わせれば、私は今年21歳で、クロより全然年上なはずなのに、何だか、悔しい。

「ねえ、クロは緊張しないの？」

「…アリアが居るし、特には」

あ、今の何だか嬉しかった。私が居るから緊張しないって、私を信用してくれてるって事だね。ああ、何だか嬉しいな、本当。

クロを拾ったのは、半年以上前。

拾った当初より、クロは私に心を許してくれてるんだ、って思えば思うほど嬉しくて、思わず笑みがこぼれてしまう。

クロと会話をしながら歩いていけば、体育館に到着した。体育館には、沢山の生徒たちで既に溢れていた。どうやら此処の入学式は新入生と先生達以外出席しないらしかった。

「アリア・シューベルトです。で、こっちがクロス・サスペール」

受付の人に名前を告げる。

クロはうちの家に住んでいるが、養子となっているわけではない。養子にしてもよかったのだが、それだと親戚の人達が煩いかもしいない、ってお母様達はいつていた。それで、うちの家に努めるメイド長の養子という形になっているのだ。

「お二人とも、1年A組です」

「クロ同じクラスだよ！」

「うん、嬉しい」

嬉しそうにはにかむ、クロが可愛くて、笑みがこぼれる。

メイド長であるサユリさんは、平民出身だ。もしかしたらクロは貴族ばかりのこの学園で絡まれるかもしれない。クロの事を私が守ってあげなくちゃっと、心の中で意気込んだ。

1年A組の席に向かえば、既に生徒たちはほとんど着席していた。私とクロは隣通しに座った。

しばらくして、入学式が始まった。正直、長い話が苦手な私は眠くてたまらなかったのだけれども、なんとか、眠らないように前をじっと見つめる。

『学園長の挨拶』

司会の声が響く。舞台へと上がったのは、若い女性。髪の色は燃えるような赤。目の色は黒。そんな美しい女性だった。

あの人が学園長？ それを思っ、前世とは違う、と実感する。前世の学校なんて、学校のトップの校長は基本的に年を取った男ばかりだった。

この世界は私が夢見ていた、ファンタジーの世界なのだ。きっと実力至上主義なのだろう、と思う。それかもしかしたらあの学園長は見た目は若いけど、実は見た目以上に生きていたりとか、そんな妄想に浸れば、眠気が徐々に取れていく。

長寿といえば、エルフだが、この世界にはエルフは居るのだろうか？ 居るのならば、ぜひとも会いたい。

『あー、私は学園長の、イリアだ。』

入学おめでとう。この学園では主に魔法や、戦闘について学ぶ。もちろん基礎的な勉強もあるが、勉強にちゃんと励めよ！ あ、もちろん、遊べ。お前らは子供なんだから遊んで笑って、そうやって学んでいくんだ』

あ、私この学園長好きかも。
と、挨拶を聞いて思った。

前世の世界の校長なんて、何だかだらだらと長つたらしい話を入学式や始業式や卒業式ではしていたものである。そんな話真面目に聞いている生徒はきつと少ない。

そもそも、だらだらと話す校長の会話なんて、ためになるかどうかといえば私は無意味だと思う。

その点、この学園長はいい。前世では教師なんて正直な話好きではなかったが、あの学園長には好感がもてる。それに、この学園長という事は魔法にも長けているはずだ。

学園長の話が終わった後、特に何も面白い事はないままに、入学式は終わった。

「では、皆さんついてきてください」

担任らしき、若い女性が私たちに向かっていった。

私とクロは椅子から立ち上がって、周りに居る生徒達の流れにのって、担任の先生についていく。

しばらく歩くと、教室にたどり着いた。

教室は前世で過ごしていた教室と対して変わらなかった。40人の机がずらりと並べられている。

教室の席は、自由らしい。

だから、入学式と同じように、クロと隣同士に腰掛けた。

「私は、担任のニア・リストアです。これから皆さんを担当しますから、よろしく願います」

担任の女性は愛らしい笑みを浮かべて笑っていった。

黒髪黒目の女性。美しいとは違う。そこにあるのは、可愛さだ。顔立ちは平凡だというのに、ニア先生は笑顔が愛らしかった。

見る者を安心させるようなその笑みに、こっちまで幸せな気分

なってくる。

「では、皆さん。自己紹介をしてください」

その言葉に、左前の生徒から自己紹介をしていく事になった。

「アツシュ・メドーサです

俺は……………」

左前の生徒からの、自己紹介。

正直、入学式の眠気が取れていなくて、視界はぼんやりと歪んでいる。耳に入ってきた言葉は、そのまま記憶にとどまらず、自己紹介は頭に入っていない。

しばらくして、クロに肩をたたかれた。

驚いてクロを見れば、

「アリアの番」

とだけ、一言いわれた。

どうやら、ぼーっとそすぎて自分の番が回ってきた事に私は気付いていなかったらしい。

私は周りから視線を向けながら、立ちあがって自己紹介をする。

「アリア・シューベルトです。よろしく」

ただそれだけいって、私は席についた。

”シューベルト”。その名前に周りが少しざわついたのを理解して、嫌な気分になった。

シューベルト家は、シリウスの名家である。

シリウスには、王家の次に続く、六家と呼ばれる大貴族が居る。

シューベルト家は、その一つである。

前世でよんだ、携帯小説を思い出す。携帯小説でよんだように、大貴族に媚びる生徒たちが居るかもしれない、と思うと少し憂鬱になる。

六家というのは、火、水、風、雷、光、闇の属性の強い力を持つ六つの家をさす事だと、お母様に聞いた。シューベルト家は、火の一家らしい。そういえば、魔法は実際は学園に入ってから学ぶものらしい。私は独学で学んでしまったけれど。

学園に入る前から魔法をつかえるなんて”異常”だ。私はお母様やお父様や、お兄様に嫌われたくない。変だと思われたくない。だからずっと隠してた。学園に入ったからには隠さなくてもすむ。それを思うとさっきの憂鬱が消えていった。

「クロス・サスペールです。よろしく」

クロも軽く、自己紹介をし終えた。

「聞いた事ないな、平民か」

ぼそつと、近くからそんな言葉が聞こえて、いら立ちを覚えてしまふ。

前世は普通に一般人だったし、貴族だから、平民だからって差別しようと思わない。お父様だって、平民が居るからこそその貴族だといっていた。

それに、クロは私が拾ってきた少年だ。家族だ。

その家族に暴言を吐いたのだ。苛々するけれども、今日は当日、目立ちたくもないから、我慢しよう。そう思って、怒りを抑える。

クロは隣で困ったような顔をしている。

私、ああいう偉そうな奴嫌いな。魔法の実戦……ファンタジー世界の魔法学園なら戦いがあるはずよね。ああいう、偉そうなのにあたったら、ぶちのめしてあげよう、なんて思う。

まあ、他の人達がどれだけ魔法つかえるかわからないし、私も武器での戦い方はわかってないから何とも言えないけれども。でも、どうせ魔法世界で生きるんだから、強く強く、なりたい！

「では、教材を配りますね」

ニア先生がそう言って、指をならせば、全員の机の上に教材が現れる。

これは、空間魔法かしら？ 六つの属性以外にも、無属性と呼ばれるものがある。空間魔法はその一種だ。よくファンタジー小説とで見える転移もそれらしい、って、お父様の書齋の本で読んだ。教材をめくって、私はふうと息を吐く。

国語、数学、歴史、魔法、武器の教材。

国語は文字を習うだけ。これはもう私は大体理解している。

数学は法則さえ理解すれば大体とける。

歴史はいまいちわからないから、楽しみだ。

武器に関しては、私はずっと楽しみにしていたものだ。

……此処までは、いい。

だけど、この魔法書は不満だ。

薄い冊子で、簡単な魔法についてイラスト付きで結構説明されているのだが、私大体使った事ある。お父様の書物の中の魔法書で大体学んだ。

いくつかう使った事のない魔法もあるけれど、イラストと術式を見る限り、多分、発動できると思う。

まあ、仕方がないか。私が先に書物で学んじやったからなのだ。そこは割り切るしかない。

そんな事を思いながら武器の教材を見る。この学園で選択できる武器は、長剣、ナツクル、槍、弓、ハンマーなどらしい。

とはいっても、一学年だからまずはそれぞれの武器の使い方について学ぶだけみたいだ。一年かけて使い方や武器の種類や対処方法を学び、二学年から武器を選択して、それぞれ武器を手にならしていくようだ。

そして、三学年になると、素手による武術の授業も始まるらしい。素手によると、言うところ、前世でいう合気道とか柔術みたいなものがあるのだろうか、と首をかしげてしまふ。それにしても、武術を習えるとは、何だかテンションが上がる。

そんな風に考え事をしている間、ニア先生の話はあんまり聞いてなかったのだが、今日はどうやらこの後、魔力量を測って終わりのようだ。実は私、これが結構楽しみだったりする。

だって、魔力量が多いか少ないかで、魔法の扱い方が色々変わるだろうし。そうだ、魔力の制御について学ぼう。教材に載っている魔法については大体扱う事は出来るのだから、後は制御できるようになるう。

さて、目標は決まった。これから武器についても学べる。

そんな事を考えてわくわくしながら、前を見る。自己紹介をした順番に魔力量が図られていく。

耳を傾ける限り、大体この年頃の生徒達は800～1000が普通なようだ。

「次、アリア・シューベルト」

そう言われて立ち上がり、わくわくしながら、魔水晶の方へと向かっていく。

透明な丸々とした、魔水晶は、魔力量を測る大事な道具である。触って変化した色で、量がわかるのだ。

ちなみに、800～1000は赤色に染まる。

私は魔水晶に手を伸ばした。

そうして、触れた瞬間、ペアとその透明な水晶に色が付く。

……染められた色は、黄だった。

低いのか、高いのか、わからなくて、ニア先生を見れば、告げられた。

「アリアさんは、500～800ね」と。

「……平均より、低いですね」

思わずシヨックでそんな言葉を放つ。

せめて平均いってほしかった。返金より低いのは、私は流石にシヨックである。

「ああ、大丈夫よ。アリアさん。魔力量は15歳になるまで増え続けるし、増やしたいなら増やす方法はあるのよ」

「本当ですか！？ どんな方法ですか？」

にこやかに笑って言ったニア先生の言葉に、自分の頬が緩むのを感じる。そんな私を見て、ニア先生は相変わらずにこにこしたまま告げた。

「魔力を使いきる事と、体力をつける事よ。

でもやる時は注意してね？ 魔力を使いすぎれば倒れちゃう事も

あるし、体力をつけすぎれば後で成長が遅くなったりするから」

先生が優しく笑って、教えてくれた。

どうやら魔力を使い切ると倒れる場合があるらしい。体力づくりをしすぎれば成長が遅れてしまう場合があるらしい。

それならば、クロと遊ぼう。無理に体力をつけるために運動をするのではなく、他の二学年の子と同じように、ただ遊ぶ。それだけでも運動になるはずだ。

そして、魔力を使い切る事は、毎日寝る前にやっつけてしまえばいい。倒れて、そのまま眠ってしまったえば丁度良いはずだ。

「そうなんですか！」

私はそう答えて、席へと戻った。

席へと戻れば、クロが私に話しかけてきた。

「アリア、魔力増やすの、やるの？」

「魔力を使い切る事はやるけど、後は遊ぶだけ。皆で遊んで体動かしたら運動になるだろうし。クロも一緒にやる？」

そう問いかければ、うん、と嬉しそうな顔で頷かれた。

何だか、クロは可愛くて、そのうち誰かに誘拐されてしまうんじゃないかと心配してしまう。男なのにこんなに可愛ければ変な男とかも出てきそうだし。

「次、クロス・サスペール」

クロは名前を呼ばれて、席を立った。

さて、クロの魔力量はどれだけなのかな？ 自分の事ではないけれど、何だか楽しみで仕方がない。

席から魔水晶をじっと見つめっていると、クロが触れた瞬間、透明が、青色へと変化した。

平均とも、私の色とも違う色。

どういう事なんだろうと、先生の声に耳を傾ける。

「まあ、クロス君は魔力量が多いのね。1300〜1600よ」

……その言葉に私は猛烈なショックを受けた。

私の魔力量を大きく上回っている、クロの魔力量。クロを貴族た

ちから守らなきゃって思ってるのに、クロより魔力量が少ないとか、本当にシヨックだ。クロと一緒に魔力量を上げる、とは決めただけ、それとは別に個人的に魔力量を上げる特訓をするべきかもしれない。それから次々と魔力量測定が終わり、その日は解散だった。

「では、寮へと向かってくださいね」

その言葉を聞いて、私とクロは立ちあがって寮へと向かった。

『こちらが寮です』と書かれた紙や立て札などが所々に設置されていて、寮にたどり着く事はすぐできた。

初等部の女子寮と男子寮は隣同士であった。

学園の大きさにも圧巻されたけど、寮の大きさにも私たちは圧巻された。

寮の前で、クロと別れて、部屋を聞いて、部屋へと向かう。

そうして、私は自分のこれから住まう部屋へとたどり着き、制服から普段着に着替える。もちろん、動きやすいもの。

その日は外で遊んでいた同じクラスの子の遊びに混ぜてもらった。そうして遊んだ後、眠る時に魔法を使って魔力を使い切り、そのまま眠った。

そうして、私の魔法学園入学は終わった。

学園入学（後書き）

変更

5月12日 / 5月14日

初めての授業（前書き）

書いてて思う事、やっぱりファンタジー世界はいい。

ファンタジー世界いきたいな、などという現実逃避がしたくなりま
した。

やっぱり、気分が沈んだときに自分が好きなように物語を綴るの
は楽しいです。

あと、思いつきで書いてるので、前の章で初め属性の所、火、水、
土、風、闇、光ってなっていました。土じゃなくて雷にしました。
雷入れる予定で入れ忘れてたし、土属性はよくわからないと思った
ので。

相変わらず武器選択についての変更。

初めての授業

入学式の次の日、私は一番乗りで学校にやってきた。

バツクからお父様にもらった制御の本を取り出して読んでみる。

きちんと制御できるようにならなければ…。今の私は魔力量は人より少ないのであるし。

「早いね」

黙々と本を読んでいたら、声をかけられた。

顔を上げれば、ブラウンの髪をなびかせた少女が居る。少女は真

っすぐに私を見つめて、にこにこ笑っていた。

「誰？」

「自己紹介聞いてなかった？」

私は、ニツケ。ニツケ・ランデンド」

少女の言葉に、私は驚いた。

雷のランデンド家。

六家の一つである、名家だ。私はまだ社交界とかに出てないから、同じ年の六家が居るって、正直知らなかった。魔法の練習するのに必死だったし、シューベルト家を継ぐのはお兄様だ。

だから、特に六家の事など気にせずに生きていたのだが、やっぱり、六家の一員だし、もっと気にするべきだったのだろうか。

「私は、アリア・シューベルト。」

ニツケ、よろしく」

「うん。よろしく。アリア。」

で、何読んでるの？」

「ああ、これ」

そう言っつて、ニツケに向かって本を見せる。”魔力制御”と書かれた文字を見て、ニツケは一瞬驚いたような顔をする。

そうして、言った。

「魔力制御の本なんてよんでるの？　すごいね」

そんな反応を見ながら、ニツケは魔法をまだ使った事がないのか
もしれない、と思った。

まあ、私がさっさと自分で魔法を使いたくて学んだのがおかしい
んだろうけれど。

魔力制御の本を読むために早く来たのだが、結局それから登校時
間までニツケと会話をする時間になった。まあ、同年代で仲良い人
が居るのは悪い事ではない。魔力制御の本は後でも読めるし。

「アリア、おはよう！」

ニツケと会話を交わしていたら、クロが登校してきた。

クロは笑顔を浮かべて、私を見ている。

「おはよう、クロ」

「はじめまして。ニツケ・ライデントよ」

「あ、俺はクロス・サスペール」

クロとニツケが互いに自己紹介をすませる。

「そういえば、今日魔法の授業あるのんだよね？」

私は二人に向かって問いかけた。昨日私は結構ばーっとしていた
話をあんまり聞いてなかった。

昨日は魔力の量を増やす事について黙々と考えていたわけだし。

「話聞いてなかったの？ 四時間目にあるんだよ」

クロスがそう言って、答えてくれた。

四時間目というと、丁度昼休み前か。初等部は大体授業は一日五
時間ある。そういうわけで、放課後は結構時間があく。放課後は皆
と遊ぶ事をしながらも、魔法の練習とかをしようと思っている。

武器選択は長剣を扱うつもりだけど、生徒達が力をつけるための
演習場には一通りの武器は置いてあるらしい。演習場には治癒と修
復の魔法がかけられているらしく、演習場で負った怪我や、演習場
が壊れた場合は全てなかった事になる。

だから、どうせなら本とかで、他の武器の扱い方も学んで、演習場で特訓しようと思うのだ。

魔法の神秘は本当に面白いし、わくわくすると私は思う。

「そっか。何するんだろうね」

「私魔法今まで使った事ないから楽しみ！」

ニツケはそう言つて、笑っている。

あ、やっぱり使った事ないのか。もしかしたら使った事ある、新入生は私とクロだけかもしれない。

それはそれで目立ってしまうけど、ま、いいかと気楽に考える。

一時間目開始の時間になって、皆が皆、席に着く。皆昨日と同じ席だ。ニツケは私より二つ右の列の一番前に座っていた。

一時間目の授業は国語だ。文字を書く事が出来ない生徒のための授業とも言える。そもそも私は前世の記憶があるから、精神年齢は大人だけれども。周りの子達は本当に今年六歳になる少年少女なのだ。

文字や、言葉が理解できないのも無理はない。

前世とは違う文字。だけれども、法則があるから私はすぐに文字を書く事が出来るようになった。

どうやら、一学年だからか、担任であるニア先生が全部の授業を受け持つらしい。

武器のみ、それぞれの先生がつけられるようである。

「文字をかける人は手をあげてください」

ニア先生の言葉に、私とクロ、そしてその他数人が手を上げる。もちろんその中にはニツケもいた。

クロは物覚えがよかったから、私が拾ってから徐々に教えて、既に習得しているのだ。

まあ、この中で書き方がわからない、生徒とはいっても、ある程度は教養があるはずだから完璧に文字がわからないだけで、少しは理解しているのだろうけれども。

「そうですか。では書ける皆さんは、書けない子達がわからないようなら教えてあげてくださいね」

それから、本格的に文字の授業が始まった。

術式を理解するためには、文字と数学を理解する必要がある。

だからとりあえず、今日の魔法の授業は魔法がつかえれば上出来、レベルなのだろうと思う。

魔法の授業の前に国語と数学を軽くやって、それを少しは理解していれば、簡単な魔法ぐらいなら発動しやすいはずだ。

それを考えて、授業は組み立てられているのだろう。

文字の授業は正直簡単で、少し退屈だった。

そうして、国語が終われば、二時間目が始まる。

二時間目は歴史の時間。この時間は私が楽しみにしていたものだ。魔法世界の、ファンタジー世界の歴史だ。どれだけ興奮する要素が溢れているかもわからない。聞き逃すまい、と私は意気揚々だ。

とはいっても、一学年の歴史だから。そこまで詳しくはやらないだろうけど。

お父様の書齋には基本的に魔法書ばかりで、歴史書はほとんどおいてなかった。だから私は歴史をよく知らない。それに、魔法書を読んで魔法を習得するので精一杯だったのだ。

「では、皆さん。

まずはこの世界を作ったと言われる神、ミネラスについてお話ししましょう」

ニア先生の言葉に、興奮した。

だって、神だよ？ そりゃ、私は神より魔王とかの方が好きだけど。それでもファンタジー世界に居るっていう実感に胸がドキマギ

する。

「ミネラスはまず一番初めに、海を作ったと言われています。大いなる海、母なる海、そう呼ばれるのはそれが理由なのです。海を作ったミネラスは次に大陸と植物を作りました。

その後、ミネラスは魚や動物をつくりました。

その、魚や動物が変化していき、今の魔物となったのです」

ニア先生の言葉に、私は興味津々だった。語られるのは、この世界の神話。

前世ではなかった、存在しなかった、物語。

前世の世界の神話を私はいくつか読んだ事がある。とはいっても、コンビニで売ってるような、簡単なイラスト付きのばかりだ。流石に分厚い神話の本とか、私読めない。

だって前世ではラノベやファンタジー小説を愛する、十代だったのだ。日本の純文学なや、文章ばかりの神話の本とかは流石に読めなかった。

そう言えば、前世で読みかけのコンビニで買ったの、あつたなあ。『幻想世界の職業FILE』とか、『伝説の「ドラゴン& amp ;ドラゴンスレイヤー」辞典』とか。ああ、読んで転生すればよかった。何だか少しはこの世界に役に立った気がする。

「せんせー、魔物が魚とか動物からできたって何ですか？」

今の世界には、動物もいれば、魔物もいる。

凶暴さでいえば断然魔物が上であり、動物と魔物が同じ存在だったとは、思えないのだろう。

「それはですね。この世界には、魔力が溢れてしまう。

空气中、水の中 様々な物は魔力を宿しています。動物たちはそんな自然の魔力にあてられて、魔物となりましたと言われています。私たちは、魔力あてられた動物達に変化していったものと、調べでわかっています」

確かに、世界には魔力が溢れている。

あふれ出た魔力は、自然を豊かにし、この世界を繁栄させるもの

らしい、ってお母様がいつてた。

実際に、人為的に魔力が失われた土地は、荒廃していつて、今もそのままなのだという。自然が魔力を回復するためにはかなりの時間を有するものなのだ。

「それと、精霊と呼ばれる種族は、自然の魔力から生まれたとされていきます。

魔力が溢れる所は精霊が満ち、その場に住む生物達を加護してくれるのです。

とはいっても、精霊は滅多に人前には姿を現しません。それに、精霊を視る、事が出来る人は少ないのです。これは才能の問題なのです。

そして、精霊や魔物とは、あちらが了解してくだされば、使い魔契約というものを結ぶ事が出来ます。

皆さんには難しいでしょうから、このへんのお話はもう少し大きくなってから私たち教師が教えてあげますからね」

え、私今此処で使い魔契約についてじっくり聞きたかった。

もしできるなら、ぜひとも、したい！ この世界ヒュドラみたいなものいるのかな？

あ、ヒュドラってのは、ギリシャ神話の英雄ヘラクレスが倒した毒蛇。頭が九つあるとも、百つあるともいわれてて、猛毒持ってるんだ。危険だろうけど、私あの幻獣好きだったの。

ちなみにヒュドラは倒されて、うみへび座になったと言われているんだ。星座と神話って、前世ではかなり関係してたけど、この世界では関係してるのかな？

そもそも、星座って呼ばれるものがあるのかわからない。私まだ子供だし、魔法の練習して疲れて夜は基本的に寝てばっかで、星座とか気にしてなかったから、よくわからない。星は見えるみたいだけど、星座あるのかな？

やっぱ、使い魔契約といったら、ケルベロスみたいなのわんこでしょ！ それか、ペガサスとか。背中に乗って飛べたらかなり、気分

よさそう。

ああ、あとやっぱり、ドラゴン！ これ必須！ 私はドラゴンが幻獣の中で一番好きなんだ。生で会えるだけできつと感激してしまう事間違いなさと思う。

よし、とりあえず図書室に寄ってみるか。この学園には、多くの書物が保管されているというし、これは読むべきだろう。

初等部から高等部まで全ての図書室だから、相当でかいだろうし。使い魔契約についての本あったら、読んでみよう。

「では、次に、この大陸についての地図を覚えてもらいます。

あなたたちには後に活用する必要がある人が沢山いるでしょうから」

ああ、そうか。此処は貴族が主にいるのだから、外交のために国の外に出る事はあるものだろう。私も、お兄様が家を継ぐけれども、シューベルト家の長女として、外に出なければいけない事があるかもしれない。

なんたって、シューベルト家は、六家の一つなのだ。

その長女とくれば、きつと私には権力があるのだろう、と思う。

まあ、権力の使い方なんてよくわからないし、使う気もないけれども。

「まず、私たちが居る、シリウスはゼラフ大陸の南東に存在しています」

ニア先生は、大きな地図の描かれた紙を黒板に張って、説明している。

教室の中には退屈そうにしている子が何人もいる。一時間目の文字の授業もちゃんと受けていない子が居たが、文字をつかえないという事は魔法をつかえないという事だと、理解してない、そんな子が居るようで思わず苦笑する。

大体、大陸の図を覚えるという事は大事な事だ。

地理を知っていればそれだけ、色々な点で有利なはずである。

そうして、二時間目は地図を説明して、終わった。

三時間目は数学だった。

「では、数学の教材を出してください」

ニア先生の言葉に皆が鞆から教材を取り出す。

私は数学の教科書をパラパラとめくってみた。

うん、術式で必要な数式に関しては私大体理解できている。それに、数学は前世の記憶のおかげで結構わかる。

というか思ったけど、前世の記憶持つてる時点で、私チートだよな。なんかそれを思うとテンションあがった。チートっていいよね。あ、でも最強のチートは私嫌なんだよね。ほら、携帯小説読んでる人わかるだろうけどさ、最強とか、不死身のチート能力者いるじゃん？ あれ、嫌なんだよね。

私は最強でも不死身でもない。最初から神様から能力与えられて全部の武器がつかえるとか、魔力量が半端ないとか、不死身とか、そんなのさ、つまらないから、嫌なんだ。

チートは好きだけど、チートがありながら努力して自分で力を得られる位置、今の位置が一番いい、と私は思う。

それに神様に会うより、そのままいつの間にか赤子に転生って、私の好みの話なんだよね。だから、自分がその物語の主人公ってだけで、嬉しすぎる。

数学の時間はそんな興奮を胸に終わった。

ほとんど授業は聞いてなかったけど、うん、大丈夫だよな。

四時間目、ようやくの魔法の時間。

私たちは学園内に設置されている転移の魔法陣にのって、演習場へと移動した。

……そうだ。魔法だけではなく、魔法陣についても学びたいな。

ああ、学びたい事が多すぎて困るなあ。ま、時間はまだあるし、ごんどん学んでいかなきゃ。

「では、皆さん。教材は持ってきましたね？」

まずは、1ページ目に書かれた《ファイア》を唱えてみてください。
い。

初めは皆できないものですが、まずは試してみてください」

うーん、私もうできるけど、どうしようか。一番乗りが終わらせてしまおうか？ よし、《ファイア》の呪文を唱えてみよう。術式に組み込む魔力をいつもより少なめにしてみても、それで魔法の威力を少し小さくできるか、それを試してみよう。

というわけで、私は口を開いた。

「 我、渴望するは、紅蓮の炎。

《ファイア》」

私の言葉と同時に、術式があふれ出し、炎を形成する。

人差し指に小さく灯る、炎。

よし、いつもより小さくできてる気がする。小さくしたり大きしたりを繰り返せば、結構調整が出来るようになるよね。それを思っ
って、嬉しくなる。

「アリアさん！ もうできたんですか？ すごいですね。流石シユールベルト家です」

その言葉に、ちょっとむっとなった。シユールベルト家だから火の魔法をこんなに簡単にできたと思われているらしい。確かに、私は火属性は得意な方だ。なぜか一番得意なのはシユールベルト家だけ
ども、風なのだけでも。

そんな隣で、クロは呪文を唱えている。

「 我、渴望するは、紅蓮の炎。
《ファイア》」

もちろん、クロも魔法を発動する事はできた。でも、クロは込める魔力が少し強すぎたらしい。

見た限り、術式が込められる魔力に耐えられなくて崩れそうになつてる感じが伺える。

そういえば、最初クロは魔法が使えなかった。私が魔力を込める量を少し小さくすれば？ といってそれで小さくしてようやく使えたのだ。

要するにだ。今考えてみれば、簡単な魔法の術式は、クロが魔力を込めすぎたせいで発動できなかったのだ。魔法を唱えた後に、体から溢れる術式は、光っている。

クロの光の量は私が発動するものより、強いのだ。多分、だけど、推測すると、クロの魔力は濃度が濃いのだ。だから、普通の人と同じ量の魔力を込めると、術式が耐えられなくて崩壊してしまう場合がある。

多分、もっと手の込んだ術式なら魔力を押さえずにでも発動することができるのだろうと、推測でできる。

「すごいわ！ 二人も最初からできるなんて」

ニア先生が嬉しそうに笑う。

周りの生徒達が、ねたむような視線を向けているが、この際無視だ。

私とクロは魔法が使えたからって、自由にしていっていいわねだから、私は教材をめくりながら、いくつかの使った事のない魔法を使ってみたりした。

そんなこんなで、魔法の授業は終わる。

ちなみに私とクロ以外、今日使えた人はいなかった。

「二人とも凄いね」

昼休み、ニツケが興奮したように私とクロを見ていった。

「どうやら先ほどの魔法の時間の事をいつているらしい。簡単な魔法以外使っていないのに、凄いと云われても正直返答に困る。」

「中部部、高等部は自分で昼ご飯を用意するか、食堂に食べに行くか、のどちらからしいが、初等部に関しては給食だ。」

給食なんて、小学校の時ぶりだ。何だか、懐かしい。

私とクロは机を合わせている。ニツケも、私の前の席の子の机を借りて、三人で食べる。

私の通っていた小学校は、昼休みの食事は席の班で食べる事が強制されていたが、何だか、自由だな、と思う。

「そう?」

「うん。だって私魔法使えなかったし…」

「ニツケさ、何で魔法が使えないか、自分でわかる?」

「んー、わかんない」

「一番初めの魔法の授業だから、国語と数学の授業をどれだけ理解できてるか試すためもあった、ニア先生は生徒達に魔法に関する助言を与えていなかった。」

「次の授業からは与えるかもしれないけれど、こういうのは自分で気付くからこそ、自分で学ぶからこそ、ためになるものだ。」

「ニツケは魔法を使うために必要なものってわかる?」

「えーと、魔力とイメージ?」

「まあそれは正しいけど。魔法を構成する術式ってのを理解しなきゃいけないの。」

「簡単な魔法なら術式とか少し理解出来てれば使えるけど、難しいのならばなおさら術式が大事になる」

「術式…?」

「んー、ニツケは術式についてよくわかってないみたいだ。」

まあ、まだ一学年だし、そこは仕方ないか。

「うん、それはそのうち習うからとりあえず置いとくね。」

ニツケは炎をイメージする時、どんなイメージをした？」

「え、もちろん、赤いの！」

元氣よく答えられた。

まあ、確かに赤は赤だけど。

多分、ニツケが魔法を使えなかったのは、イメージの問題だと思う。簡単な魔法の術式は理解する事はたやすいし、ニツケはライデント家の一員だから、多分術式の理解は問題ない気がする。

さつきも授業真面目に聞いていたし。

「じゃ、炎の特徴は？」

「特徴…？」

「うん、特徴までイメージすれば、多分魔法つかえると思うよ？」

「俺もそう思う」

私の意見に、クロも同意する。

私たちの言葉に、ニツケはじゃあ、今度試してみる、と嬉しそうに笑った。

五時間目。

まだ武器選択は行っていないから、ホームルームのようだ。

学級委員長を決めるようにとの事だ。クラスの代表、学級委員長、私は絶対に面倒だからやりたくない。そう思える、係だ。

きっと、誰も立候補しないんだろうな。と、思っていた。だけど、

「誰かやりたい人いますか？ いたら手を挙げてください」

ニア先生のそんな言葉に、

「はいっ」

と元氣よく手を挙げる少年が居た。

少年は茶髪の髪をなびかせている、活発そうな顔をした少年だった。

何だろう、見た限り目立ちたがり屋な気がする。

「ガトル・スネイル君ですね。」

皆さん、ガトル君でいいですか？」

それに、皆して賛成の言葉を告げる。どうやら皆、学級委員長になりたくないらしい。まあ、それはそうだろう。

しかし、目の前のガトル・スネイルは嬉しそうににこにここと笑っている。学級委員長になって何が嬉しいのか、正直私には理解などできない。

「じゃあ、学級委員長も決まったので、武器について話しますね。武器は二学年にあがってから選択することができます。それまでは沢山の武器の事を知り、どの武器が一番自分にあっているかを決めてください」

よし、この一年は武器について学ぼう。じっくり、先生の話の聞かなければ。

それから、学級委員長が早くに決まって、時間が余っているからと、自由時間だった。

私はその間、クロとニツケとずっと話していた。

「では解散です」

その一言に、学校は終わった。

授業を全て終えて、初めての授業にぐったりしている人が多い中、私は図書室にいこう、と意気込んでいるために、笑みがこぼれていた。

「アリア、今からどこかいくの？」

「うん。図書室にいこう。クロも来る？」

「んー、いいや、俺はニツケ達と遊ぶ！」

「そう。じゃあね」

私はクロとニツケに別れを告げて、迷いながらも図書室に向かった。

結論からいうと、図書室は滅茶苦茶な広さだった。

視る限り、何千か、何万の書物があるようにも思える。

さてと、私が読みたいのは、魔法書、魔法陣、使い魔、武器の扱い方、歴史……それらの本だ。

読みたい本は沢山あるけれど、私はとりあえず、高等部はどうするか決めてないけど、中等部まではこの学園にとどまるつもりだ。

その間に、沢山の本を読みあさるつもりである。

まずは、一番気になっている、魔法陣の本を数冊借りてみよう。

そう思って、歩いて歩いて、探して、ようやく魔法陣について書かれてる棚を見つけた。

棚を見つげるだけで時間がかかるって、本当この図書室は広い。

『初心者でも簡単！ 誰でもわかる魔法陣 初級編』と書かれた本と、『魔法陣の歴史』という本、『基礎魔法陣』という本を手にとった。

手が届かなくて、《ウイングバード》よりも、簡単な縦に浮くだけの魔法をさらっと唱えて書物を手に取った。まだ私の体は今年六歳になるばかりだ。背が届かないのは仕方がない。

それから魔法陣についての本を持って、受付にいけば、変な目で見られた。

きつと、何でこんな子供がこんな魔法陣の本を？ とでも疑問に思っていたのだろう。というか、多分六歳児は図書室になんかあんまり来ないと思う。遊び以外では。

その日は、寮に帰って魔法陣の本を読んで、寝た。
流石に全部は一日では読み切れない。地道に読んでいこうとおもった。

そうして、学園初日は終了し、私たちの長い学園生活は始まった。

初めての授業（後書き）

学園生活。

それをきちんと書いてみたくて来ました。長くなっただけ。思いつきで書いてるので、矛盾点あったらいつてください。直します。

あと大量更新してるのは、トップに書いてあるように気分が沈んでるからです。授業風景滅茶苦茶書いていて楽しかったです。

変更

5月12日 / 5月14日

二度目の春（前書き）

ここから話、ちよくちよく飛ぶかもです。

前話の一番最後をこの話につなぐために少し変えました。

二度目の春

春が来た。

この学園での、二度目の春。

私は、二学年へと進級する。

去年の末に行われた進級試験は、簡単なもので、私は学年首席で進級を果たした。

私は二学年になるのが、楽しみだった。

二学年になったら、武器選択が行われる。

私はもちろん、長剣だ。西洋の騎士とか、そういうのがかっこいいって思うのが私だから。

武器によろやく触る事が出来るのだ。去年は全て扱い方などを学んだだけで、実際には触る事が出来なかったから。

去年、演習場で武器を借りようとしたのだが、係の人に一学年は駄目だと言われ、断念した。今年からは演習場にある武器を触る事が出来るかもしれないのだ。

とはいっても、長剣選択者はまずは木剣でならしていくらしいが、私はそれだけでわくわくしていた。

入学式から行っている寝る前の魔力の使い切りで、あれから図つてはないけれど、魔力は増えたと思う。もちろん、図書室で本を借りて、自力で魔法の練習もした。魔法陣も少しは描けるようになった。

使い魔についての知識や歴史などの本にももちろん手を出した。

使い魔契約、というのはあちら側の意志が重要なのだ。誰でも契約を結べるわけではない。

もちろん、小説とかであるように、召喚する事もできるらしい。だけど、召喚するといってもそれは危険な行為だ。召喚された精霊や魔物が危険ではないとは限らない。

使い魔契約を結ぶるのは精霊はともかくとして、魔物は大体上位

の、人の言葉を理解できる魔物だけだ。下位の魔物に関しては理性より、本能で動いているらしい。

最も、人に育てられた魔物や、魔物の声を聞ける人間（よくわからないが、世界には居るらしい）ならば下位の魔物と契約を結ぶ事が出来ると言う事だ。上位の魔物と、契約を結ぶ場合は、上位の魔物に気にいらなければ仕方がないのだ。それは、危険な事だ。

だから使い魔契約をしている人は少ないらしいが、私は使い魔契約したいから、頑張る。

そういえば、二学年からは既に実力でのクラス分けになるようで、主席の私と次席のクロと、成績優秀者のニツケは同じクラスだった。担任はまた、ニア先生。

あの、学級委員長をやっていた、ガトルも同じクラスだった。

まあ、ガトルは筆記に関しては少し駄目だが、魔法に関してはトップクラスであった。

本人は学園に入学するまで魔法を使った事はなかったけれど。男たるもの、強くなければいけない、という信条の父親と一緒に結構入学前から運動をしていたようで、魔力量に関しては去年の時点でクロと同レベルだった。

二学年の教科書は既に配られた。そこに書かれた魔法書の魔法は全て使える。制御は去年からやっているから、少しはできるようになったけど、もう少し制御できるようにならなければいけない。

国語、数学は、理解しているから、私は大丈夫。

歴史は知らない事もまだあるだろうが、本を読んでいるために、結構な知識が頭に入っていると思う。

やっぱり、一番の楽しみは武器の授業だ。寧ろそれ以外の授業は退屈になるかもしれない。

「アリア、次武器の授業だよ。私弓だから、第五演習場だ」

「私とクロは、第一演習場か」

演習場は、いくつもこの学園に設置されている。

今回から、武器に触れる、授業なのだ。だから演習場で行うのだ

ろう。

クロも私と同じ長剣を選択しているから、一緒に第一演習場へと向かう。

演習場の中へとクロと共に足を踏み入れる。

「わぁ」

それと同時に、クロは感嘆の声をあげた。興奮したのは、私も同じだ。数十本もの、木剣が並べられていた。授業で使うためのものだろう、私たちが触れる事のできる武器が目の前にある。

ようやく、触れられる。

それに、興奮して仕方がなかった。

最も、私たちはまだ今年七歳になるばかりの子供なのだから、置かれているのは子供でも振りまわせるように重さは調整してあるだろうが。

次々に演習場に入ってくる生徒達は武器を前に興奮した様子である。

「では、一人一人木剣をとれ」

武器選択の、長剣の授業を行ってくれる、先生の名前はトルネア・アークス。

20代前半ぐらいの若い男の先生で、黒髪的美男子だ。教職員の中にも、トルネア先生を狙っている人は多いと聞く。

罪作りの男なんだよね、要するにトルネア先生は。

木剣が、一人一人の手に渡る。

何だか、手に武器があるんだって思うだけで、嬉しくなる。他の生徒達も、興奮したように声をあげている。

そんな中で、トルネア先生は口を開いた。

「とりあえず、見本を見せるから、見よう見まねで振り回してみろ」

トルネア先生はそう言つて、木剣を片手に、それをふるう。

…まずは、見よう見まねに、振り回す事から。基礎が出来てなければ何でもうまくいかないものである。

私は武器を扱うのは初心者だ。頑張ろう、そう意気込んで、私は棒をとりあえず両手で上に持ち上げてみる。

うっ、重い。

私の体は、女だ。力も男みたいにあるわけではない。ああ、どうせ転生するなら、男に生まれたかった。いや、でもそれじゃあ心が女、体が男になってしまふ…。それはそれで、困るな、なんて考える。

結果として、木剣を持ちあげる事はギリギリできたけど、これを振りまわせるかどうかといえば難しい。

筋肉とか、握力とか、そういうのももつと鍛えるべきかもしれない、と私は思う。もう少し体が大きくなれば振り回しやすくなるかもしれないけれど…。二学年の、武器の授業は武器を手になじませるための授業なのだろう。

…とりあえず、演習場で木剣を振り回す練習を放課後にもしよう。私が一番扱いたい武器は長剣だ。でもその前に棒術を学ばなければいけない。だから、頑張ろう。

授業時間中、私はずっと、熱心に木剣を振り回す練習をしていた。

魔法はともかくとして、武器の扱いに関しては、本当にまだまだだ。

これから頑張つて力をつけなければ。

二度目の春（後書き）

感想で頂いた矛盾点を変更してみました。

（変更有り）と書かれている所は変更した所です。

気晴らしの思いつきで始まった物語なので、矛盾点があつたらざん
どん教えてください。なるべく速く直します。

変更

5月14日

上級生と仲良くなりました。(変更あり)

「はっ…はっ……」

息切れがする。

演習場で、木剣を借りて、熱心にふるっていたら、流石に疲れが出てくる。

今は、夏休み。

ほとんどの生徒達は実家に帰省している中、私とクロは寮に残った。

学校がある一学期の間も、週に4回は演習場にきていたし、毎日寝る前に魔力を使い切る、というのもやっていたし、簡単な魔法を唱えてみて、魔力制御を試みたり、相変わらず図書室にも通い続けている。

要するにだ。やりたい事が多すぎて、時間がたらないのだ。それで、早く武器の扱いになりたい私は学園に残る事にしたのだった。クロは私が帰らないのに、帰るわけにはいかない、とかいって、一緒に学園に残った。

私が今棒を振り回している横で、クロは魔法の練習をしている。

「空より振り落ちたるモノ。」

自然が与えし恵みのモノ。

それは、土地を潤わし、恵みを授けん」

少し長い呪文。

呪文と共に、術式が形成されて行くのが、私の目には見える。

「我、形成を望むモノ。」

我が魂にその形を刻め。

《アクアボール》」

溢れだす、術式。

今回の魔法は魔力を込めすぎる、というのがなかったらしい。術式は安定している。

術式はクロの目の前で絡み合い、小さな、野球ボールぐらいの、水の丸状の塊を生み出す。

圧縮された、水のボール。それは攻撃系の魔法である。

下手な人がやると、水のボールは大きい物が形成される。この魔法は小さいボールを形成して、攻撃するほうが、威力が抜群なのである。

クロは生み出した魔法を操作し、演習場に出現させた、的へとぶちあてた。

ぶつかり合う音がしたかと思えば、クロの魔法は的を貫通していた。

「おお、流石クロ！」

称賛の言葉を言えば、クロは嬉しそうに笑った。

相変わらずクロは可愛い男の子だと、思う。

クロまで一緒に魔力量増やしとか、魔法とかの練習しなくてもいいと言ったのに、クロは一緒にやるといって、こつやって特訓をしているのだ。

ちなみに、今この場に他の生徒達は居ない。学園に残ってる人は少ないから、まあ当たり前前の事だろう。

しばらく、私は木剣をふるっていたが、腕が疲れてきたので、木剣を地面に置いた。

もっと、振り回すという行為に慣れなければいけない、と思う。

ふう、と息を吐いた私は、ポケットから一枚の四角形の紙を取り出す。それには、昨日書いた魔法陣が描かれている。

きちんと、発動するかの実験もこのしところと思つたのだ。

魔法陣は、描く事が出来ればどこでも発動できるという便利なものである。書く際に、たつぷりと、陣に自分の魔力をなじませる必要があるけれども、それさえ完璧にすれば、発動することができる。紙に描かれているのは、炎を発動させる、魔法陣。

私はそれを、地面に置くと、魔法陣へと、意識を集中させる。私と、魔法陣は魔力のパスで繋がっている。私には、そのパスが見える。これも術式同様クロには視えないらしい。

：今度、異能力が何かについての本でも図書館で借りてみようかと最近思う。

意識を集中させて、発動を願う。

魔力がパスで繋がって、魔法陣はパアアと光を発した。

そして、次の瞬間、魔法陣から術式があふれ出し、ボツ、と炎が舞い上がったのである。

「よし、ちゃんとできてるわね」

「魔法陣かあ。俺もやってみたい！」

「うん、じゃあ後で教えてあげる」

クロにそうやって笑いかけて、私は考えを頭に巡らせる。

魔法陣を扱った戦闘方法。その知識を手に入れられれば、戦闘方法を生み出せれば、魔法陣も戦闘に有効活用できる。魔法陣の描かれたカードは、そのまん魔法カードと呼ばれ、それは誰にでも使えるものとして、お店に売ってある。

基本的にほとんどの魔法使いは、巨大な陣を使った戦闘なんてしない。自分で陣を描いての、戦いも陣を描いてる間に敵に攻撃されればどうしようもないからしないものである。

魔法カードに描かれている陣は基本的に簡単なものばかりだし。複雑な陣はカードに描ききれないし、陣は大きければ大きいほど広範囲に攻撃を可能にし、威力がますものだ。

だから、魔法カードに描かれた魔法陣を行使する、とはいってもそこまでの威力はない。基本的にカードを使って、相手の気をひい

たりするぐらいが主な使い方らしい。

魔法カードに描かれる魔法陣に描かれていない難しい陣などは書けない人が多いと、本に書いてあった。だけど、私の中には、魔法陣を使つての戦闘がしてみたい、という思いも溢れている。だから、頑張つて考えてみようと思う。

魔法陣と魔法の違いというのは、書くか、声に出すか。ただそれだけの違いだ。魔法陣は術式を理解して、それを描くモノ。魔法は術式を理解して、イメージし、唱えるモノ。

「それにしても、アリア凄いよね。色々勉強してるし……」
クロにそんな事をいわれた。

「んー、私強くなりたいたからね」

私は、笑つてそれだけ答える。

強く、強くなりたい。

どんな場所でも生きていけるぐらい、強く。世界中を冒険するという事は困難に見舞われる事がある事なのだわかってる。だからこそ、なるべくどんな時でも対処できるように色んな事を学びたい、そう願うのだ。

しばらく、クロと会話を交わして、またそれぞれ、特訓をすることにした。

「あれー、小さい子がいる！」

クロが棒をふるう隣で、私は黙々と魔法陣が発動するかについて、確認していた。

そんな中で、女性特有の甲高い声が響き渡った。

私とクロが声のした方を見ると、二人の男女が居た。

両方とも中等部の制服をきている。少女の方はつり目で、茶髪の髪をなびかせた活発そうな少女だった。少年の方は黒髪のかせ毛をなびかせた、眼鏡をかけた少年だった。

二人は、私たちに近づいてきた。

「ね、ね、君たち初等部の子だよな？ 何年生？ てか、それ魔法陣じゃん！ しかも魔法カードじゃないって事は自分で書いたの？ 夏休みにまで色々やってるなんて、凄いね！」

一気に少女がマシガントークを放つ。

この先輩テンション高いな、なんて思いながら私はその言葉に答えた。

「私がアリア・シューベルトで、こっちが、クロス・サスペュールです。」

魔法陣は、興味があつたので本で学びました」

「シューベルトつて、もしかしてネルの妹！？」

「ええ。お兄様を知っているのですか？」

「クラスメイトだ」

男の方がそうやって答える。

どうやら話を聞いていれば、二人ともお兄様のクラスメイトらしい。女のほうが、クライス・ミキシム。男の方がキア・トリストル。「それにしても、何で二人とも実家に帰ってないの？」

「…夏休みは演習場にこもって魔法とかの練習しようと思いましたが」

「俺は、ただアリアの付き添いです」

私たちが答えると、二人とも、一瞬驚いたような表情を浮かべた。ほとんどは実家に帰っているわけであるし、二学年から特訓をしようとする人は居ないので驚くのも無理はないだろう。

キア先輩は感心したような、表情を私たちに向ける。

「二学年でそんなやる気満々つて、凄いな」

「努力してるんだね」。ね、アリアちゃんとクロス君が使える最大の魔法つてどのくらいのレベル？ 私ちよつと気になるなあ」

なんていわれて、的に向かって魔法を放つ事になった。

さて、最近使えるようになったばかりの、風の魔法でも、放ってみるか。その反応次第で、今の中等部のレベルがわかるだろうし。

そんな思いで、私は口を開く。

「 烈風の如く、爆風の如く。
我望むのは、蹴散らすチカラ。
我求むのは、吹き荒らすチカラ」

呪文を唱えながら、イメージする。

「 求むは迅速なるモノ。
願うは鋭きモノ」

体内の魔力が、震えてる。
ドクンツ、と心が震える。

「 我、魂に刻むは烈風。
我、魂が求むるは爆風。
我、魂を願うは疾風」

さあ、先輩方に見せてやろうじゃないか。私が今使える、最高の、
風の攻撃魔法を。

「 刻め、求め、願え。
刻み込まれた烈風を。
求められた爆風を。
願われた疾風を。
我が前に、形成せよ！
《ウインドストーム》」

体がどくんつと熱くなる。

体中から、形成された術式が溢れだす。

溢れだした術式が、目の前で形となっていく。

形成されたのは、前世で言う竜巻の小型バージョンが二つ。

風を纏った、鋭いモノ。もつとでかい竜巻を生み出せる人も、もつと沢山の竜巻を一度の呪文で生み出せる人もいる。

私は練習して、ようやく二つの竜巻を形成することを可能にした。驚いたように私を見ている、先輩たちの視線を感じながら、私は二つの竜巻を操作する。

ドコオオオン、と大きな音を立てて、的へと直撃した。そうして、音を立てて、崩れていく、いくつもの的。

魔法を唱えた後、振り向けば、先輩達二人は啞然とした表情のままだった。

「えーと、どうしましたか？」

やりすぎたかな、なんて思いながら、先輩達に声をかけた。

何だか、固まっているクライス先輩とキア先輩。どうしようかな、と考えていたら、突然、クライス先輩にガバツと抱きしめられた。

「きゃーっ、アリアちゃん、凄い！！」

あれって、風属性の難しい魔法でしょ？ 私火属性が一番得意だし、アリアちゃんが使った魔法とか使えないよ！ 二学年で使えるなんて本当凄い」

「えっと、クライス先輩、離してくれませんか？」

「じゃ、お姉ちゃんって呼んでくれたら離す。あ、クライス姉でもいいよ！」

「え、何ですか？」

「私妹欲しかったの！ だけど男兄弟しかいないんだもの！」

私を強く抱きしめたまま、テンションを上げて、喋るクライス先輩。んー、これ、呼ばないと離してくれない感じ…？

「ね、呼んで！」

「……クライス姉。これでいいですか？」

「うんうん、いいわ。それで！」

これからもそう呼んでね、可愛がつてあげるから！」

「あー、はい」

何だか、気にいられてしまったようである。

まあ、クライス先輩…いや、クライス姉に好かれる事は悪い事じゃないし、別にいいけれども。

そうして、ようやくクライス姉は私から手を離してくれた。

「とうか、キアはどうしたのよ？」

「いや、俺もさっきの魔法ようやく使えるようになったばかりだから…、アリアが使えるのにシヨック受けてて……」

…キア先輩には悪い事してしまったかもしれない。自信喪失しなければいいけれども。

というより、私は前世の記憶有りっていうある意味チートだから、私と比べても仕方がないと思う。

そんな風に思っていたら、

「じゃあ、次俺やる」

クロがそう言って、的の前に立つ。

私はそんなクロをじっと見つめた。

「 熱き魂を願ひ。 明るき魂を願う。

全てを燃やしつくしき、モノ。

全てを焼き尽くしき、モノ」

クロが言葉を紡ぐ。

それを真つすぐに私と先輩達は見ている。

「 我が求めし、赤。

我が求めし、紅。

我、魂に、赤き、紅き印を刻む。

我、魂に、赤き、紅き証を示す。

《フレイムリング》

詠唱を告げると共に溢れだす、術式。

術式が形成しは、炎でできたいくつもの輪。真ん中がぁいているその輪は、的へと絡みつき、収縮する。そして、きつく、的は締め付けられ、バアアンツ、と効果音を立てて、破裂する。

「……クロスも十分すげえ」

キア先輩が、感嘆の声を漏らした。そして続ける。

「アリアとクロス…、まさかお前らみらいなのが二学年にはばんばんいるとかいわねえよな？」

「そんなわけないですよ。私は学年首席で、クロが次席なんです！魔法の練習も結構してますし、だから使えるだけですよ」

私が一生懸命魔法書とにらみ合って、何度も練習して、それでようやく発動することができた魔法だ。簡単に他の人が出来たら、それはそれでシヨックである。

「そうか、それなら安心した」

「というか、キア先輩とクライス姉、何しに来たんですか？」

「もちろん、魔法の練習だ」

「そうなんですか。じゃあそれぞれで練習しましょう！」

私のその一言を合図に、それぞれでの、特訓が始まった。

それにしても夏休みにまで演習場に来るなんて、キア先輩もクライス姉も努力家だなあ、と思った。

そうして、私は、二人の上級生と仲良くなった。

二学年の夏休みは、キア先輩とクライス姉、そしてクロと演習場で特訓ばかりする日々を私は過ごすのであった。

上級生と仲良くなりました。(変更あり)(後書き)

夏休みに特訓する私たちの世界でいう小学校二年生笑

ちなみにアリアはファンタジー世界にきてから強くなる事が趣味と化しています。

変更

5月14日

初めてのパーティー（変更あり）（前書き）

また少し飛びます。
冬休みのお話です。

初めてのパーティー（変更あり）

「お嬢様、よくお似合いです」

「アリア様、こちらのドレスはいかがですか？」

…冬休み。

特訓ばかりして過ごした夏休みとは違って、私は実家に帰省していた。

というのも、貴族同士で小さなパーティーがあるのだ。私もそれに一緒に行くのである。

正直、特訓をしたかったのだが、両親に頼まれたから、私とクロはパーティーに出る事にしたのだ。とはいっても、クロはサユリさんのお手伝いで使用人としてパーティーに行くのだが。

そういえば、クロは最初使用人として行く事を嫌がっていたが、お父様と何か話したかと思うと、行くと言ったのだ。何を話していたのだろうか？

私はシュールベルト家の長女として、緒アーティーに出なければいけない。だから今、家に仕えるメイド達の着せ替え人形と私は化していた、正直、ドレスなんてどんなでもいいと思ってるのだが、メイド達は”アリア様にはこんなのが似合うはず”とかいいながら次々とドレスを持ってくる。

赤、黄、黒、白、様々な色のドレス。レースのついた愛らしいものや、花飾りのついたものも沢山ある。どれでもいいから速く終わらせてほしいと私は切に願う。

時間が余るといふならば、魔法の練習をしたい。色々な本を読みたい。だからドレス選びに正直こんなに時間をかけたくないのだ。だけどもまだにメイド達は次々とドレスを持ってくる。

ドレスに着替えて、見せる。その行為を繰り返しながら初めての社交界に、緊張している自分が居るのに気付く。

精神年齢は大人だといっても、私は庶民だったし、パーティー

なんてものとは無縁な人間だった。そんな私がどんな因果で異世界に貴族として、記憶を持ったまま生まれたのだろうか、それが自分で不思議だ。

「アリア様！ これにしましょう！」

「いえ、アリア様にはこれです！」

「お嬢様に似合うのはこれに決まってるでしょう！」

着せ替え人形の役割が終わった後もまだ話しあっている、メイド達。どれでもいいのに、とため息がこぼれた。

結局、ドレスはお兄様が決めた赤いレース付きの物に決まった。

パーティー、当日。

私は緊張を隠せないまま、お母様に手を引かれて、会場の中へと入る。

沢山のスーツやドレスを着た、貴族たちがそこには溢れていた。パーティーなんてものきちんと出た事はないから、心臓がバクバクする。作法とか身だしなみとかについてはお母様にたっぷり仕込まれたけれど。

そういえば、夏休みに一緒に特訓をしたクレイス姉とキア先輩はお兄様に私が魔法をどれほど使えるかについて興奮して話したらしい。お兄様は私に魔法の才能がある事に喜んでくれた。もちろん、驚いていたけれど。

それにしても、と私はお兄様を見る。

お兄様は離れた場所で同年代の貴族の子供達数人と会話を交わしていた。というか、お兄様が会話を交わしている一人はクライス姉

だった。

着飾って、ドレスを見にまわっているクライス姉は女の私から見ても綺麗だった。その同年代の貴族の男の一人はクライス姉を熱っぽい目で見ていた。

そんな風に、お兄様達を見てたら、

「アリアちゃんじゃない！」

クライス姉とばつちり目があつて、そんな言葉をかけられた。

「アリアちゃん、おいで！」

そうやって手招きされる。お母様をちらりと見れば、お母様は頷いてくれた。だから私はお兄様とクライス姉の所へ向かった。

「この子、アリア・シューベルトちゃん！」

ネルの妹で私にとつても妹みたいな子なの！」

そう言つてクライス姉に紹介される。

ジロジロと興味深そうに見られながら、私は自己紹介をした。

「シューベルト家長女、アリア・シューベルトです。」

よろしく願います」

そうやって頭を下げる。

「おい、クライス。本当にこんな餓鬼が『ウィンドストーム』なんてできるのか？」

先ほど、クライス姉を熱っぽく瞳で見ていた黒髪の男が、そんな風にクライス姉に話しかける。

何だか、喋り方が偉そうだ。それに、いきなり餓鬼呼ばわりされて、疑われるなんて、少し嫌だな、と思う。

「本当よ。私、キアと一緒にこの目でみた！」

につこりとクライス姉が笑つてそう言えば、その男の眉間に皺が寄つた。というか、この人の名前何だろうか。

「クライス、お前まだアイツと一緒に居るのか！？」

「そりゃあ、私キアの事好きだもん！一緒に居てキアの心を手に入れるの！」

あれ、さらつと今クライス姉いったけど、キア先輩に対してのク

ライス姉の感情は恋愛感情だったのか。夏休み中ずっと居たのに、私気付いていなかった。

というか、目の前の男哀れ。クライス姉に明らかに恋愛感情持つてるのに、クライス姉に全く気付かれていない。そして、クライス姉、鈍いというか残酷だ。そんな、好きな人が目の前で他の男を好きだなんていつたら、シヨック受けるに決まってる。

「クライスには、あんな平民似合わない。お、俺の方が…」

…俺の方が似合う、と言いたいのかな？ 遠まわしに気持ちを伝えたいわけなのだろう。何だか、目の前の光景に青春だな、と温かい目で見えてしまう。

「シヨット！ キアの事平民平民って馬鹿にしないでよね！ キアにはいいところ沢山あるんだから！」

あ、シヨットと呼ばれた貴族がしょんぼりしている。

その様子を見ながら、お兄様達は笑っているから、これがいつもの光景なのだろう。

うん、頑張れ。シヨットさんと言えない。

「お兄様、あの二人はいつもああなのですか？」

「…まあ、そうだな」

お兄様はそう言っつて、笑って頷く。

お兄様や同年代の人達は、二人の会話を聞きながら、料理や飲み物に手をつけていた。

お兄様達は中等部…：前世でいう中学生。恋愛沙汰の一つや二つあつてもおかしくないだろう。そんな事を考えてみて、ふと、気になった。お兄様にはそういう恋愛沙汰があるのか、どうか、という事が。

そういうわけで、早速聞いてみた。

「お兄様には、お慕いしている方はいるの？」

「ぶっ……」

お兄様は飲んでいたジュースを私の質問に噴出した。いきなりの事だったから、驚いたのだろうけれども、いきなり噴き出したお兄

様に、周りが少し注目していた。

飲んでいたジュースを噴き出したせいで、ジュースが少しきいてたスーツに飛んでいる。

「それで、どうなの？」

お兄様は、外見的に見ても美男子だ。私の兄であるし、性格が悪いわけではない。

正直いって、妹の目から見てももてると思うのだ。そんなお兄様に恋愛沙汰があるのなら、それはそれで面白いな、と思った。

「え、ええ…と」

どもっているという事は、お慕いしている方が居るのだろうか。それとも妹に言いにくい恋愛沙汰とか。そういう事を期待しながら私はお兄様を見た。

そうしていたら、答えてくれた声は、お兄様じゃない、人の声だった。

「こいつには、三年片思いしてる奴が居るんだ」

そんな声に、ふと顔を上げれば、金髪の男の子が居た。その少年はにこにここと笑って私を見ている。

「えーと、あなたは？」

「俺？俺はエル・ダクイン」

「闇のダクイン家の方ですか。ところで、お兄様の片思い相手について詳しく教えていただけませんか？面白そうなので聞きたいです」

闇属性の一家。シリウスに存在する六家の一つ、ダクイン家の息子。それが、この少年なのだろう。

私が面白そうだから聞かせてくれと頼めば、エルさんは話すな！と喚いているお兄様を黙らせて面白そうに笑って語ってくれた。

三年前、要するにお兄様が四学年の時、お兄様はその少女、リルア・ルースルトに出会ったらしい。彼女は絶世の美女や美少女とい

うわけではなかった。どちらかといえば顔立ちは平凡で、大人しい女の子らしい。

一方お兄様は、その頃から大変もてていたらしい。お兄様は、シユーベルト家の次期当主でもあるし、容姿も中身も申し分ない。そのため、貴族達からの告白は多かった。

しかし、お兄様は、女には正直興味を示していなかったようである。

そんな二人の出会いは、学校の廊下。丁度荷物を運んでいたリルアさんとお兄様はぶつかり、それで荷物を運ぶのを手伝って、その時見た笑顔に、お兄様はやられてしまったようだ。

それからというものお兄様はリルアさんを目で追うようになり、そこから恋心は始まったらしい。

それで少しづつ喋る中になっただけだが、いまだに告白に至っていないらしい。

告白しようとはするらしいが、いつも一歩手前で無理だ、と告白できないらしい。

「……お兄様、ヘタレだったのね」

「……うっ」

私の正直な感想に、お兄様はショックを受けたような顔をする。

お兄様はもつと自信を持って、がっつりアプローチしてしまえばいいのに、と私は思う。

「確かに前へタレだよなあ」

「エルまで、んな事いうな！」

お兄様とエルさんの会話に笑みが零れた。

仲良しなんだなあ、ただそれを思って。

「お兄様、今度リルアさんに会わせてね。未来のお義姉様になるかもしれない人だし」

「そうだよなあ。ネルが勇気を出せば現実になるかも知れないよなあ」

私はにっこりと笑い、エルさんは楽しそうに悪戯に笑ってる。

そんな私たちを見て、お兄様はふう、と疲れたように息を吐いた。ちなみに後から聞いた話だが、エルさんはお兄様の親友でお兄様の一つ下、要するに六学年であるらしい。

お兄様の初恋話について軽くからかったあと、私は知り合いが居ないか見渡して、ニツケを見つけた。

真っ白なドレスをきていて、それがとてもニツケには似合っていた。私は私の存在に気付いていない、ニツケに近づいて、後ろからぼんっ、と肩を叩いた。

ニツケは一瞬びくっ、と体を震わせて、こちらを振り向く。

「アリア!? きてたの?」

そうして私の顔を見て、驚いたようにそんな言葉を放つ。

「うん。ニツケもきてたんだね」

「そういえばクロスはきてるの?」

「あー、クロは貴族ではないから、使用人としてお手伝いしてるよ。」

ほら、あそこで飲み物運んでるの、クロじゃん」

そう言っつて、私はクロを指さした。ニツケの視線がクロの方へと向く。

クロは使用人の服装に身を包んで、飲み物をせつせと運んでいた。その姿はどこか可愛らしくて、見ていて笑みがこぼれる。

ニツケも、

「わー、本当に使用人してる!」

なんていって、楽しそうに笑っていた。

しばらく、ニツケと話した後、お母様とお父様に呼ばれて、私は挨拶回りをした。

愛想笑いを浮かべての、挨拶。

何度も、何度も、自己紹介をして、よろしく願います、と告げる。

シューベルト家に生まれたのだから仕方がない、そう割り切って、私はいさつ回りを頑張った。

そうして、それが終えた後には、どっと疲れが押し寄せたのだった。

三学年へ（前書き）

また飛びます。感想してくださった二人の読者様の指摘された所を変えてみたのですが、これでも不自然でしょうか？

不自然な所あったら報告お願いします。後誤字脱字報告もしていたければ助かります。

三学年へ

私は三学年に進級した。去年も首席で進級。クロが次席だった。ニツケは去年着々と力をつけていたから、私やクロに続く三番目の優秀者として進級する。

担任は、今年はニア先生ではなかった。

「俺が今日から担任を務めるルイスだ」

そういう、先生はいかにも体育会系、という感じの人だ。実際にこの先生は、筆記より実技の方が得意なようである。

30代過ぎぐらいだろうか、肌の色は黒く、元気のよい、教師である。

三学年に上がったから、今年からは武術の授業もある。武術の授業は前々から楽しみにしていたものだ。剣術はこの一年で少しは上達したとは、思う。本格的に長剣を振り回せるのは、五学年からだ。

「今年から課外学習がある。班は後日発表する」
ルイス先生はいった。

課外学習というのは、自然にあまり触れあつた事のない学園の子供たちを自然に触れさせるのが目的だ。三学年～六学年の生徒には課外学習が行われる。

ヴィネアの森。という、比較的弱い魔物しか存在しない、そんな森だが、魔物が出ると言えば出る。そのため、毎年行われる課外学習には中等部の八学年の生徒達が付いてくる。

ギルドの依頼を七学年から受ける事が出来、去年からギルドの依頼をしている八学年の生徒は、ヴィネアの森に居る程度の魔物ならば退治する事が出来るからだ。

課外学習の班、というのは、三学年一人、四学年一人、五学年一人、六学年一人、八学年一人の五人で形成される。八学年の生徒の中でも、攻撃魔法は苦手で回復系の魔法ばかりが得意だとか、戦闘が不得意な人ももちろんいる。その場合は、三学年一人、四学年一

人、五学年一人、六学年一人、八学年二人で形成されるのだ。要は、強い人と組ませて戦力を平等にするわけである。

その班で、ヴィネアの森で自由に一週間過ごすのだ。

……八学年といえば、お兄様やクライス姉、そしてキア先輩の学年だ。もしかしたら、同じ班になるかもしれない。

そして後日、一人一人に班の書かれたプリントが配られた。

第二十五班。

三学年 アリア・シューベルト。

四学年 ジェラルド・ルース。

五学年 ルナ・メドーサ。

六学年 ノーバル・チスタス。

八学年 ネル・シューベルト。

……お兄様と一緒になんて、なんて偶然だろう。

ちよつと、驚いてしまった。でも、お兄様と一緒に学校の行事を一緒にやれるのは楽しみだ。

「アリア、ネルさんと一緒なの？ いいなあ」

「ん？ クロ、自分の班はどうだったの？」

「俺は全然知らない人だった」

「そつか。ま、課外学習あるのは二ヶ月後だし。それまでに班の人との交流があるはずだから、そこで仲良くなっちゃえばいいのよ」
そう、課外学習は二ヶ月後、6月中旬に行われる。

課外学習は、弱いとはいえ魔物がいる森に一週間いるという授業なのだ。その間にコミュニケーションが取れなければどうしようもない。それに、互いの实力を見る、というのは大事な事である。

そんなわけで、課外学習までの間に班同士で集まって交流をする、という機会が数度あるのだ。

…課外学習。森の中で行われる授業。そして、魔物を初めて目にすることが出来るかもしれない。この目で。それは楽しみだ。

だけどその課外学習の中で、魔物という、生物の命を奪う事になるかもしれない。

此処は、前世とは違って、魔物が溢れる、危険な世界なのだから。それを思って、私はふう、と息を吐いた。

三学年へ（後書き）

次回は、課外学習の班で交流しているアリアを書きます。

課外学習の班の交流

「三学年、アリア・シューベルトです。よろしくお願いします」
私は頭を下げる。

目の前に居るのは四人の同じ班の人達。

今日は課外学習での班の交流会である。私の班が集まったのは、
初等部の屋上だった。

青く澄んだ空に、流れゆく雲。天気の良い日に屋上に来るのは何
とも気持ちの良いものである。

私がぺこりと頭を下げて、自己紹介をして、前を見る。前を見れば、お兄様が優しい顔をしてこちらを見ていた。

次に挨拶をしたのは、赤髪の少年だった。

「俺はジェラルド・ルーンだ！」

偉そうな男だった。名前からして六家に続く大貴族、ルーソ家の息子なのだろう。そんなジェラルドは私をちらりと見るとすぐに視線をそらした。

……何なのだろう？ そう思ったが、気にしても仕方がないか、
と気にしない事にした。

次に挨拶をしたのは、黒髪の長い髪をなびかせた少女だった。前世の世界でいう魔女のイメージにぴったりな人だ。

「ルナ・メドーサですっ。」

よ、よろしくお願いします」

何だか、おとなしそうな人である。緊張したような面立ちをしていて、どこかそわそわしている。

「ノーバリ・チスタスだ。よろしく」

そう言ったのは、銀髪の少年だった。六学年だから模擬戦とかもやっているんだろうし、きつと、少しは戦えるんだろうな、と思う。

「ネル・シューベルト。アリアの兄だ。よろしく」

お兄様はそう言って笑った。

美少年であるから、ルナはその笑顔に顔を赤らめていた。もちろん、この班の班長は年長者であるお兄様だ。課外学習までに互いの実力をきちんと確認する必要がある。

「とりあえず、自分の得意属性と扱う武器を言ってくれ」

お兄様がそう言つて、私からそれを申告する。

「私は風と火が得意です。それで扱うのは長剣です」

「俺の得意属性は雷だ。で、俺も長剣」

「私は、光が一番得意です。扱うのは、弓です」

「僕は水が一番得意だ。武器は槍」

それぞれが、いった。

ルナ先輩が光。ノーバリ先輩が水。という事は、二人は回復系の魔法が得意かもしれない。光と水属性のみ、回復系の魔法があるのである。回復系の魔法はイメージが難しいらしく、なかなか使える人は居ない。

私も魔法は攻撃系ばかり習得していたので、防御系や回復系はそんなにできない。

「そうか。俺は得意属性は火。武器は長剣だ。ところで、ルナとノーバリは回復系の魔法は使えるのか？」

お兄様が、二人に向かってそう問いかけた。回復系の魔法が使えるかどうかは重要である。それによって、パーティーでの役割が変わるからである。

「私は、攻撃より回復の方が得意です」

「…僕は回復系は苦手で、攻撃系ばかりです」

ルナ先輩は回復系の魔法が得意らしい。ルナ先輩は武器も弓だし、後ろで援護する役割になるだろうと思った。

実はというと、私はお兄様の実力もそこまで知らない。学年が離れているのもあって、お兄様が戦う姿なんて見たこともないのだ。今回はお兄様の戦いが見られるかもしれないという機会なのだ。その事にも私は興奮していた。

「お前ら、明日の放課後は開いてるか？」

演習場で、互いの実力を見るのがいいと思う」

お兄様は、そう提案する。

その言葉に、それぞれが頷いた。

そうして、次の日、私たちは互いの実力を見るために演習場に向かうのであった。

課外学習の班の交流 (後書き)

今回は短いです。

次は演習場での話です。

それぞれの實力。

「じゃあ、まずはアリアからだ」

今、私は班の皆と共に、演習場に居る。というのも、昨日いった通りに互いの實力を見るためであった。第一演習場で、まずそれぞれの魔法の實力を見る。そのあとに、武器の扱いについてみる、という形である。

私の班と同じ考えの班もちらほらいたようで、いくつかの影が演習場には見られた。

「じゃあ、お兄様。風属性の魔法にするわ」

私はそう口にして、魔法を放つ。

「烈風の如く、爆風の如く。」

我望むのは、蹴散らすチカラ。

我求むのは、吹き荒らすチカラ」

それは、去年クライス姉とキア先輩に出会った時放った魔法。前より、上達したと思う、風属性の攻撃魔法。

「求むは迅速なるモノ。」

願うは鋭きモノ」

体内に魔力の流れを感じる。体が、熱くなっているのを感じる。

「我、魂に刻むは烈風。」

我、魂が求むるは爆風。

我、魂を願うは疾風」

よく考えれば、お兄様に魔法を見せるのは初めてかもしれない。

精一杯、やろう。それを思っ言葉を放つ。

「 刻め、求め、願え。

刻み込まれた烈風を。

求められた爆風を。

願われた疾風を。

我が前に、形成せよ！

《ウインドストーム》」

体中から溢れだした術式が、竜巻を形成する。

去年形成した竜巻より、少し大きな竜巻。それが、七つ目の前に形成されている。

……実は、詠唱する際に、形成する術式をいじれば、魔法の威力が上がるという事にこの前気付いたのだ。今回の私が形成する竜巻が普通より大きいのは、それが理由である。

形成された魔法を、自在に操り、的にぶち当てた。

ブオオオオオオッ。

大きな音を立てて、竜巻が炸裂する。的はもちろん無事ではなかった。

七つの的にぶつかった竜巻は、七つの的を木っ端みじんに破壊した。

それを確認して、私は笑って、術式を解除した。

そうして、満足げに、班の皆の方を見れば、見事に皆、驚いたように顔を歪めていた。お兄様も、どこか驚いたような顔をしている。

「ア、アリアすげえ！」

ジェラルド先輩が、そう言って興奮している。

「……あんなに詠唱長いのできるなんて」

ルナ先輩は、啞然としている。

「……………」

ノーバル先輩は、絶句している。

「クラリスに聞いていたが、実際に見ると驚くな
お兄様は、そんな言葉を放つ。

そういえば、去年この魔法をキア先輩達に見せた時に、キア先輩
がようやく使えるようになった魔法、だっていつてたっけ。そうか、
だから皆驚いているのか、それを納得する。

「次は、ジェラルド先輩の番ですよ」

私がつこりと笑えば、ジェラルド先輩は頷き、修復された的の
前に立つ。そうして、詠唱を唱える。

「 それに我は何を映し出すか。

我は、怒りを映し出す。

響くのは、怒声の如き、天の怒り」

ああ、あの魔法を使うのか、と始まった呪文を前に私は思考する。

「 我、魂に、その怒りを映し出せ！

《サンダーレイジ》」

体中から溢れだした術式が、形成するのは、雷だ。

降り注ぐ雷は、的へと直撃して、的を破壊させる。四学年の人達
がどのくらい魔法が使えるか、正直わからないけれど、お兄様が驚
いたような顔をしている所を見ると、ジェラルド先輩は四学年では
かなりの腕なのかもしれない。

その後、ルナ先輩が前に出る、そうしていった。

「 えっと、私は防御の呪文を唱えます」

そうして、ルナ先輩は、口を開いた。

「 自然の恵みをこの身に感じ、

冷たきモノを求めるなり」

私が知らない魔法だ、そう理解して、何だか楽しみになる。

「拒絶するモノ。」

反射するモノ。

「妨げを感じ、防ぎを感じ、
そうして我は求めるなり」

ルナ先輩はそのまま、詠唱を続ける。

「我、魂に呼応するは守りのモノ。」

我、魂が願うは守りのモノ。

《アクアウォール》」

現れるのは、水の壁。透明な水で形成された、絶壁。

それは、攻撃を防ぐモノ。それは魔法を反射するモノ。確か、そういう魔法のほずだ。

一見何もないように見えるのに、確かにそこには壁が存在している。この魔法は、発動する事より、壁を保ち続ける事が難しい魔法のほずである。魔力が切れれば魔法は消えてしまうものであるし、持久戦にいった時は魔力量が物を言う魔法だろう。

ルナ先輩は、魔法を解除すると、

「防御と回復なら、一応得意なんです」

と、にっこりと笑った。

本当に、ルナ先輩は後方で援護するようなタイプなんだなあ、と私はただ思った。

次は、ノーバル先輩の番である。

「聖なるチカラ。」

天から振りし、チカラ。

我が身に集いし、聖なるモノ」

光属性の呪文は、魔法を聖なるチカラとしてたたえて、そしてイメージする魔法である。

「 我が求めるのは、邪を払うチカラ。

光を求め、闇を払いしモノ。

形成するは、聖なる矢。

邪なるモノに降り注ぎ、悪をめさん。

《ライトアロー》」

溢れだした術式が溢れだした光の矢を生み出していく。

呪文の長さから見て、難しい魔法ではないだろうけれども、その矢の多さは凄まじいものである。何十本もの矢が、一氣に的を狙い尽くす。

…… 凄い、と私は感嘆の声を上げる。私もあの魔法を使えるが、ノーベル先輩ほど多くの矢は生み出せない。

ふと隣を見れば、お兄様も驚いたような表情を浮かべていた。

そうして、次はお兄様の番である。正直わくわくしてならない。

お兄様の魔法、初めて見る、お兄様の魔法。

「 我願い、我求め、我渴望す。

姿を現すは、赤きモノ。

そこに存在するは、紅きモノ」

私はまだ、知らない魔法だ。それを思っ、興奮する。

「 熱きモノ、暑きモノ。

燃やしつくしき、その赤きモノ。

願うは、赤。求むは紅。渴望すはアカ」

形成されて行く、術式が私の目に映し出される。
何処までも細かい、何処までも洗練された術式。

「 暴れしモノを願う。

灼熱を求む。強き龍を渴望す」

術式が、形となっていく。形成されていく。

「 我の願いを聞き届けよ。

我の求むるモノを形成せよ。

渴望しモノをこの目に映し出せ。

《フレイムドラゴン》」

お兄様の、体から溢れだした術式が、形となっていく。

それは、龍だった。前世で、読んだ物語に居るような龍。言つなればドラゴンボーのシェロンみたいな龍。竜ではなく、龍。

炎でできた龍を、不思議だと思った。魔物の本で読んだ中に、竜は居ても龍はいなかった。

その龍は、真つすぐに、横に並ぶいくつもの的を燃やしつくしていった。

……流石、お兄様。それにしても、後で竜と龍の事をお兄様に聞いてみようかしら。そう、思った。

その後は武器での戦い方を見る事になったが、私はまだ三学年で武器の扱いには慣れてないという事で、それには参加させてもらえ

なかった。

だから、ジェラルド先輩とルナ先輩とノーバル先輩とお兄様の武器の扱いをただ観察していた。色々な武器を使えるようになりたい、そう願うのだ、私は。だから見ていて損はないと思った。

こうして、互いの实力を見るための集まりは終わった。

課外学習・一日目（変更あり）

「では、皆、検討を祈る」

そんな言葉と共に、課外学習は始まった。

「お兄様、初めはどのようにするの？」

私たちが今居るのは、ヴェネアの森。名前の由来は、昔隣国の女王様がこの森で暮らしていた事だったと本に書いてあったと思う。ヴェネア、それが王女の名前。幼いころにある事情でこの森で暮らす事になった彼女は治癒師として優秀で、亡くなったのは何百年も前の事だが、後世に知られている方である。

木々が溢れて、澄んだ空気の、森。実家の近くにある森を思い出して、少し懐かしさを感じてしまった。

「そうだな、まずは…、食料を調達する」

この森で課外学習を行う一番の理由は、食料が豊富だからである。この森に課外学習に来て五回目のお兄様はきつとこの森に存在する食べられるモノがわかるのだろう。

食べられる森のモノとかそういうのは覚えておけば将来役に立つかもしれない。私はそんな事を思って、わくわくしてしまう。それに初めて魔物を見る事が出来るのだ。

怖い、けど見てみたい。それが正直な私の感想だ。

私たちは森の中を徘徊する事となる。

図鑑で見たキノコを発見して、私はそれを手に取る。そうして、手にいっぱい抱えた。お肉を食べるためには、魔物か、動物かを殺さなきゃいけない。

お兄様や、他の先輩達も沢山の植物を手にとっていた。去年も来ているからか、先輩たちはなれた様子である。

ある程度、植物を発見すると、次にお兄様が先導して私たちは川

へと向かう。

地形が頭の中にしつかり入っているのか、お兄様はどんどん進んでいく。

そうして進んだ先には、透き通るような青があった。光が反射して、水面がキラキラと光っている。ピチャツと魚が跳ねる音が耳に届く。

「ガウウウウ」

ふと、そんなうめき声が聞こえて、私はあたりを見渡した。

声のした方を見る。そこには、獣が居た。大きさに言えば、まだ子犬ぐらいの獣。発達しかけの牙と、鋭い爪を持つ、黄色がかった毛皮の獣が視界に映る。

その獣は、川に近づき、水を飲んでいた。

私は、初めてみるその存在に目が惹かれて、じっと見つめてしまう。ああ、異世界に居るんだ、そう実感して、興奮に胸が熱くなる。

「何ぼーつとしてんだ？ ネル先輩達もういつてるぞ」

「ジェラルド先輩、あの獣が…」

「ん？ 獣なんて何処に居るんだ？」

「あの川の所に居るじゃないですか」

私は視界に映る獣の方を指さしながら、言った。

「だけど、ジェラルド先輩はそれに首をかしげていった。」

「何処に居るんだ？ そんなものいないぞ。」

「ネル先輩達が待つてるから行こう」

「え」

「いいから、行くぞ」

…目を凝らして私は、獣の方を見る。

確かにそこに、黄色い獣は存在している。そうして、私はちらりとジェラルド先輩の方を見た。ジェラルド先輩は、何もいないと言った。

でも、確かに視界には映ってる。私はわけがわからないままに、獣の方をちらちらと見ながらジェラルド先輩を追いかけるのであつ

た。

魚はお兄様とノーバル先輩とジェラルド先輩が川の浅瀬に入って取ってくれた。

魚を取るのにしばらく時間が経過すると、あの獣はもうすでに森の中へと入っていった。結局お兄様とかにも言ってみただけど、お兄様もない、と言った。

どついう事なのだろうかと、頭がこんがらがっていく。

：課外学習が終わったら調べてみるのもいいかもしれない。好奇心が私の心を埋め尽くしていった。

私たちは今、木の下へと腰をおろし、のんびりとしていた。

薪を集めて火を起こし、取ったばかりの魚を熱する。もぐもぐとキノコを口に頬ぶりながら、私はただそこに居た。

「さて、寝ていいぞ。俺がとりあえず、起きとくから。しばらくたったら、ノーバル、交代してくれ」

「はい、わかりました」

お兄様の言葉に、私は頷くと、体を横たえた。

初めての課外学習に、少しの疲れを感じながら眠りの世界へと入っていく。

そうして、課外学習一日目は、あの獣以外の魔物に会う事もなく、終了した。

課外学習・一日目(変更あり)(後書き)

短いです…。とりあえず、二日目から戦闘出てくるかと思います。

課外学習・二日目（前書き）

森の名前を統一してなかった事に気付いて直しました。

課外学習・二日目

チュンツチュンツ。

と、小鳥の囀りが聞こえて、目を覚ます。朝陽が、木々の合間から降り注いでくる。

顔を洗いたい。

私はそう思つて体を起こした。

「アリア、おはよう」

声が聞こえてそちらを見れば、お兄様が居た。ノーバリ先輩と交互に起きて番をすと言つていたから、それで起きていたのだろう。私もお兄様に笑いかけた。

「おはよう、お兄様。私顔を洗いに行きたいわ」

私がそう言えば、お兄様は、少し待てと口にして、ノーバリ先輩へと近づいた。

そして、ノーバリ先輩の体をゆすつて、ノーバリ先輩を起こす。

そうして、お兄様は私と川に行つてくると告げると、私と一緒にその場を後にした。

お兄様の二人つきりで、森の中を歩いていく。

何だか、とても不思議な気分がした。歳が離れているし、お兄様は学園にいつもいたからこんな風に一緒に二人で出掛けるとか、あんまりないのだ。

昨日、あの獣を見た、川に私とお兄様は行つた。

透き通るような綺麗な水。前世では、インドア派だったし、あんまり外にでかける事はなかったから、こういう自然は新鮮で、気分が良くなる。

水に手をいれて、バシャバシャと顔を洗つた。お兄様も隣で同様に顔を洗っている。

「ガウウウウ」

近くで、獣の音が聞こえた。

昨日よりも近い距離の獣の声。ふと、その方向を見れば、少し離れただけの位置で、昨日みたあの獣が、こちらをじっと見つめていた。

魔物、なのだろうか？ よくわからない。お兄様にはやっぱり見えていないで、そして鳴き声は聞こえていないらしい。私はじっと獣を見つめ返した。

敵意は感じない。おそろおそろ、私は近づいてみた。お兄様はこちらを見ていない。

「ガウ」

小さな、獣に私は手を伸ばす。

獣は不思議そうに（とはいっても私からそう見えただけだが）、私をじっと見つめている。

獣の、黄色い毛に触れようとする。……感触がない。私の手は獣の体を通りぬけていた。驚いて、手を獣から離す。

獣は、一度ガウウウと鳴いて、そして、私の手に、ゆっくりと頬をおしつけた。

……今度は、触れた。どうしてなのか、よくわからない。私から触るのは、触れない。獣から触れるのは触れられる。この違いはなんなのだろうか？

毛はふかふかとしていて、何だか気持ち良い。

そんな風に少しその毛に触れていれば、突然、獣が口を大きく開いた。発達しかけている牙だけど、一瞬ぎよっとなる。だけど、獣は私を傷つける事はなく、ただ、その噛みは空を切った。

「……………」

その瞬間、何故かよくわからない脱力感が、どっと私を襲った。見れば、私から溢れた淡い光が漏れていた。何だか、よくわからない。

「ガウウウ」

驚いて、獣を見つめる私。そして獣はガウガウと鳴いて、私にすり寄ってくる。

そんな風にしていれば、

「アリア、何してんだ？ 行くぞ」

お兄様に声をかけられた。

私は獣の頭を軽くなでると（今度は触れた）、お兄様と一緒に皆が居る場所へと向かうのだった。

…今は昼間だ。

獣と出会ったのは、今朝。今もなお、少し脱力感がある。なんていうか、体の力が抜けている感じがする。で、この感覚どこかで感じた事がある、って私は行きついて考えてみると、魔力消費時の感覚に似ているのだ。

それで思い当たったのだが、私から溢れた光は、魔力ではないかという事だ。いつもは魔法を行使するために術式が組まれた魔力を私は見ている。それで今回は術式が組まれていない、純粋な魔力が私から溢れだしたのだ。

…よくは見えなかつたが、獣の口の中に行つてた気がする。もしかしたら、あの獣は私の魔力を食べたのかもしれない。

となると、あの獣は何だろう？ 本は結構な数読んできたつもりだけど、ピーンとこない。

「アリアちゃん、どうしたの？」

考え事をしていれば、声をかけられた。顔をあげて、そこに居るのはルナ先輩だ。

「んー、ルナ先輩って、魔力を食べる魔物とか知ってますか？」
とりあえず、遠まわしにその事を聞く。

私より二学年もルナ先輩は上なのだ。もしかしたら何か知ってるかもしれない、そう私は思ったのだ。ルナ先輩は私の言葉に首をか

上げた。そうして、何度か頭をひねって、そうしていう。

「んー、よくわからないわ。何匹かいた気もするけど…。私はそこまで、詳しいわけではないから」

「そうですか…、ならいいです」

私にしか見えない、それだけで考えると、魔法の術式にもそれが言える。見えるか見えないか…、の差。見ると言えば、目に何かあるのかな？ しかし、見た目的に私の瞳は普通のはずだ。特別な瞳の文献とか課外学習終わったら図書室で借りて読もうか、なんて思う。

それに、獣の声も聞こえない…、って事は、見る事も聞く事も出来ない。よって、認識できていないって事で…、やっぱり謎だ。

「アリアちゃん、何か知りたい事があるなら、ネル先輩に聞いたら？」

「…そうですね。お兄様にも後で聞いてみます」

私がつこりと笑えば、ルナ先輩も笑ってくれた。

昼食を食べ終わった後、私たちは班員全員で、森の中を徘徊する事となった。

そうして、私たちは魔物と出会った。

理性のない魔物が、私たちを喰らわんと襲いかかってくる。鳥系の翼のある魔物。その名もブラックバード。黒い鳥で、攻撃力はそこまでないが、この魔物は一匹であれば20匹は近くに居ると言われている。一気に攻撃されたら、流石に色々と面倒だ。

「 それに我は何を映し出すか。

我は、怒りを映し出す。

響くのは、怒声の如き、天の怒り」

お兄様が、魔法の呪文を唱え始める。
溢れだしていく、術式。

「我、魂に、その怒りを映し出せ！

《サンダーレイジ》」

それは、ブラックバードへとぶちあたり、彼らを殺しつくしてしまふ。

私は私で、長剣を振り回し、何匹かを殺した。生物を殺すの、なんて前世ではなかったから、少し複雑な気分になる。だけど、この世界で、何年も生きていたから、殺す事が悪い事だとか、全然思わない。それにこの世界の私は力を持っている。

前の世界では私は何もできない、ひきこもり気味の少女だった。だけど、この世界の私は違うのだ。

前世で、ライトノベルや漫画が大好きだった。ファンタジー世界に興奮して、どうしようもないほど大好きだった。その世界で、私は生きている。それを実感して、嬉しくなった。

仕留めたブラックバード達は、今日の夕食にする事になった。ブラックバードの皮をはく作業は、初めてやる事だったから、少し楽しかった。実家では、調理場に立たせてなんてもらえなかったし、寮では食堂で食べる事ばかりだったから、何だか新鮮な気分になった。

どんな事でも、初めてやる事はどこか興味深いものである。

「できたわ！」

皮はぎを終わらせ、私は笑ってお兄様に報告をした。

ふと、視線を感じて隣を見れば、ジェラルド先輩が、何故かこちらを見ていた。

「どうかしましたか？」

「いや、な、何でもない」

……不自然な対応である。本当にどうかしたのだろうか、と心配

になるが、本人がそういうなら大丈夫なのだろう。

「さて、夕食も手に入ったしあとは自由行動していいぞ。ただアリアとジエラルドは、此処から離れる場合は用心して俺達のうち誰かを一応連れていけ」

「わかりましたわ！ では、お兄様、私森を探索したいので、ついてきてくれますか？」

問いかければ、お兄様は頷いてくれた。

∴あの獣に会いたい。そんな思いで提案して、森を徘徊して回ったのだが、結局あの獣には会えなかった。

課外学習・三日目(1)

今日も朝早くに目が覚めた。

ノーバリ先輩が起きて番をしていらしく、私に挨拶をしてくれる。ああ、よく眠った。と私はただ思う。

本当にこの課外学習というのは新鮮でならない。私は、前世ではだらけた中学生だった。そして現世では貴族の娘として生まれた。この世界は前世よりもずっと多くの自然が溢れている。

前世では科学が成長していて、環境破壊がされていたけど、現世ではそれがない。科学という概念がまずない。その代わりに魔法がある。

「……ノーバリ先輩、私顔洗ってきます」

あの川の近くにあの獣が居たのだ。また会いたかった。

あの獣は、私に害意はないようであるし、他の人達に見えないのが、何故だか私にはわからない。だから、知りたいって好奇心が疼いているのだ。

「あー、僕もついていく」

ノーバリ先輩はそう言った。そうして、彼はお兄様を起こして、それで私とノーバリ先輩で川へと向かった。今日は、あの獣は居るのだろうか、それを思えば、わくわくしてきた。

結局あの獣が何なのか、わからないでいる。姿が見えない存在の話をして信じてもらえなかったらどうしようとか、そんな事も考えちゃって、結局私はあの獣についてわからないままである。

川へと向かっていけば、目の前に、何かが浮いているのが確認できた。

「……？」

今まで見た事もなかった、半透明のように見える、人に似た形をした存在。

…何なんだろうとか、目の前の存在は、よく見てみれば、二匹もい

る。不思議に思っ、私はそれを凝視する。

そうすれば、それも、私の方を見た気がした。

私が見えているの？

…澄んだ声が、耳へと響いた。私は驚いてぎょっとしてしまふ。

そんな私に、ノーバリ先輩は声をかける。

「どうした？」

「え、いや、何でもないです」

もしかして、この存在もノーバリ先輩に、見えてないのだろうか？
そんな事を考えながら、私は、それを見て、小さく声をかけた。

「…あなたたちは、何？」

そう問いかければ、どこか、嬉しそうな笑い声その場に響いた。
やっぱり、見えてるわ。

あら、珍しい。私たちは精霊よ。風の精霊なの。

精霊…：という単語に私はもちろん驚いた。精霊は才能がないと
視えないと聞かされていた。という事は、私には視る才能があった
のだろうか？ それを思うと興奮した。

「…精霊、さん？」

あら、精霊を視たのは初めて？

それに、私は頷く。

「アリア、どうした？ 顔洗いにいくんじやないのか？」

ノーバリ先輩の声に、私ははつとなる。とりあえず、川に行かな
ければ、それを思っ、精霊さん達に頭を下げ、ノーバリ先輩と
一緒に川へと向かう。

ノーバリ先輩は、精霊を視えていない。あれ、あの獣も私以外に
は見えてないんだよね？ となると、あの獣は精霊のようなもの？
んー、よくわからない。精霊が視えるっつのは、珍しい事だと聞
いていたし、誰かに簡単に言っつていいものなのだろうか？

そもそも、視えるっつていう事は私の目がおかしいのか？ 魔法の
術式に、精霊に、あの獣…。普通なら視えないはずの、存在が視
える私。

どうしようか、なんて考えながら川へとたどり着く。
光に反射する、綺麗な水に手を伸ばし、顔を洗う。

……とりあえず、課外学習が終わったら、色々調べてみよう。
自分について色々知らなければ厄介な事になりそうだ。

バシヤツ、バシヤツと、顔を洗いながら私はそんな事を考えていた。

「ガウウ」

と、唸り声が耳に届く。

そちらへ視線を向ければ、あの獣が居た。

昨日は少し警戒していたようなのに、今日は普通に、獣は私に近づいてきた。相変わらず、ノーバリ先輩に獣は見えていないようである。

「ガウガウ！」

獣はそう鳴いて、私の服に牙を立てると、此処に居てはいけない、とでも言う風私を引っ張る。

「……どうしたの？」

小さな声で、私は問いかける。一昨日から見ていた獣が、強く引っ張るのだ。だけど、私はそれに従わなかった。お兄様達だっているのに、勝手に獣と一緒に歩いていくわけにはいかないと思ったのだ。

「ガウガウウ！」

だけど、獣は私の服を噛んだまま、引っ張ろうとする。

よくわからない。どうしてこの獣は私を引っ張ろうとしているのだろうか？ そんな事を考えていれば、

「ア、アリアー！！ う、後ろ！」

ノーバリ先輩の、必死な声が響いた。

そんな言葉に、後ろを振り向けば、巨大な、赤い毛の、熊が居た。

課外学習・三日目(1) (後書き)

ちよつと短い、かな？

そしてうまく書けてるかわからない、作者です。

課外学習・三日目(2)

赤い毛皮の熊。ああ、私、この魔物を知ってる。森に住まう、強き覇者。

巨体にも関わらず、素早いスピードで襲いかかってくる、魔物

レッドベア。

「シャアアアア」

レッドベアが声を上げ、私に向かって、鋭い爪を振り下ろしてくる。私はとっさに、体をひねらせ、それを避ける。

「っ」

速いつ！ その事実には私は驚き、目の前の魔物を前に、体が硬くなるのを感じた。

「我、望むは」

詠唱を、唱えようとするも、レッドベアは鋭い爪で襲いかかってきて、それを放つ事はできない。

ちらりとどうにかノーバリ先輩を見れば、ノーバリ先輩は恐怖にか固まっていた。

ああ、もう！

私はいら立ちを感じながらも、考える。どうすればいいのか、わからない。避けるので、私は必死だった。

そもそもこの森に、何故レッドベアが居るのかわからない。

腰に突き刺していた長剣を引きぬき、どうにかあてようとするも、当たらない。

体を鍛えてきたから、体力には自信がある。だけれども、ずっと避け続けるなんて真似、できなかつた。

振り下ろされたレッドベアの爪が、私の体を傷つける。

服ごと破かれ、裂かれた、肌。

溢れだした血液に、思わず悲鳴をあげそうになる。ドクンツドクンツと心臓がはやくなる。

ああ、痛い痛い痛い!!!

レッドベアが襲いかかってくるのが、視界に映る。

また、死ぬのか？ そんな思考の中、私は諦めたように瞳を閉じた。だけど、痛みではなく、聞こえてきたのは、獣の声だった。

「ガウウウウウウウウウウ!!!」

あの、獣の鳴き声だと、私は気付いた。目を開ければ、レッドベアに向かって、唸り声をあげている、あの獣が居た。

それに加え、かすれていく視界の中で、うつすらと映る影が見えた。

大丈夫？ 大丈夫？

私たちを視界に捕える事の出来る稀な子。

よかった、よかった、間に合って。

獣とレッドベアの間、風が吹いていた。その強風は、レッドベアがこちらに来るのを防ぐかのように立ちふさがっていた。

あの子が呼んだの、私たちを。

あの子に、血を与える事を許可してほしい。そうすれば、あなたを助ける事が出来る。

……血を与える？ ああ、ああ、痛い痛い。どっちにしろ、このままじゃ駄目だ。このままじゃ、駄目なんだ。死にたくない、私はこの世界でやりたい事が、溢れてる。

そんな思いで、私は頷く。

風が、私の血を獣の方へと運んだ。それを、黄色い毛を持つその獣は、口に含む。そうすれば、私の体は、どっと疲れが押し寄せてきた。よくわからないが、また魔力を食われたみたいな感覚だった。

それと同時に、獣の体が光を発した。そうして、ガウウウウウウウと唸り声をあげて、その獣の体が変化する。

大きさが、まず変わった。そうして、牙が、鋭く変化する。長く

伸びた尻尾が、私の視界の中で、揺れている。

「シャア!？」

レッドベアから、驚いたような声が響いた。初めて、獣を認識したかのような声。……血液を与えて、見えるようになった？ よくわからないまま、私は、痛みを感じながら、ただそこにいた。

口を開く気力もない。血液は、いまだに流れ続けている。

人の子よ、少し待って。

今、光の精を呼んでいる。それまで、生きて。

それまで私たちはあの子の手助けをしましょう。

風が舞った。獣がレッドベアに向かって踊りかかった。自然が、精霊たちの糧となる、精霊達にとって、この森は自分のテリトリー。竜巻を起こし、それによってレッドベアは身動きが取れない状況にある。

私はその様子を見ながら、意識を失っていく。

待って、今治してあげるから。

そんな、光の精の声であろうそれを耳にしながら。

「アリア!!」

お兄様の、必死そうな声を耳にしながら。

私は、瞳を閉じた。

課外学習・三日目(2) (後書き)

うまくかけてる自信ないんですが…。面白いと思ってくれてる読者様が居ればいいなあと思います。魔物の種類やら種族やら名前やらがあんまり思いつかなくて困ってます…。そして熊の鳴き声ってよくわかりません…。

霊獣という存在（変更あり）

「……………」

目が覚めて、私は驚きにあたりを見渡した。

私は、森に居たはずだ。そうしてレッドベアが居て、それで…。なのにどうして私はベッドに寝ているのである？ わからない。わからなくて頭がこんがらがってくる。

「ガウウ」

突然、獣の声が響いて、驚いてそちらを見れば、あの獣が居た。私の血を飲み、姿を変えた獣。だけど今の姿は前に見た小さな恋に程度の大きさの獣だった。だけど前とはどこか形が変わっている気がする。

その獣は、床に座り込み、こちらを見上げていた。

「…………… 此処何処？」

獣に問いかけても、獣は何もいわない。まあ、声とか聞こえてきたらびっくりするけど。そんな事を思っていたら、別の声が響いた。

人の子よ、大丈夫？

「…………… 森の、精霊？」

何で、此処に居るんだろう。何て言う疑問が心にわいた。そもそも私は死にかけていたはずで、何でベッドに寝ているんだろう…？ 本当にそれがわからなくて、頭がこんがらがる。

混乱してるね。此処はあなたの学園のベッド。

あの後、やってきた人間達があなたを此処に連れてきた。

「レッドベアは？」

この子が頑張ったのと、私たちも手助けして、あと、強い人間がやってきて、倒していった。

風の精はそう言って、私を見ていた。

ガウウウ、とベッドの脇でなく、獣。この獣は、レッドベア相手に戦ってくれた。この獣は、何なんだろう？ そもそもお兄様達に

は見えなかったはずで、何故此処に居るのだろうか？

「精霊さんは、どうしてここまで来てくれたの？」

精霊とは、本来住処とした場所からあまり動かない存在だと、文献で見た。その精霊が、森に住まうはずの風の精霊が此処に居る事が不思議だった。

この子は、森の住人だから。そしてあなたは、この子の契約者。

私たちはあなたに、説明しなければならぬ。この子とあなたはまだ意志疎通できない。

”まだ”という言葉に頭が引かかる。それに、契約者だと言った。私が、この獣の契約者なのだ。契約、という言葉で思い浮かぶのは、獣が私の血を飲んだ記憶。

そして、今まで見てきた、文献の内容を思い出す。……使い魔契約。それは血を与える事によって成り立つと、確かいつてなかっただろうか？

「……この、獣は私の、使い魔に、なったの？」

啞然として、私は問いかけてしまう。正直、信じられなかったのだ。私に、そういう存在が生まれたという事実が。実際に私は信じられずにいる。

そう、この子はあなたの魔力を気にいった。

この子はあなたの魔力を食らったの。そうして気にいった。この子はまだ幼い。だけど死にかけたあなたを助けたいと願った。

そうして、この子はあなたと契約した。

血で繋がれる、契約。それは破棄する事は叶わないと、文献に書いてあった。使い魔の契約が破棄されるのは、どちらかが死んだ時のみだ。

そうして、使い魔は、血の契約によって繋がっている。主が呼べば、使い魔は一瞬にして主のもとに行く事が出来るのだ。離れていても、前世でのファンタジーの携帯小説であったような召喚のよう

な感じで、呼びだせると確か書かれていた。

この子は、” 霊獣 ” と呼ばれる存在。魔力を食して生きる、獣。

食らった魔力によつて、姿や形、そうして能力を変化させし、獣。

「…この子が、私以外に見えなかったのは？」

霊獣は、限られた人間にしか見えない。霊獣は、稀にか現れない契約の獣。人との契約をしたこの子の姿は、今や誰にでも視れる。

” 契約の獣 ”。そう、精霊はいつた。私は文献を読みあさったけど、そんな存在を今まで知らなかった。使い魔についての本にも綴られてはいなかった。

霊獣は、自然に溢れる魔力から生み出されるそういう、存在。

世界に現れるのは、何十年、いや、何百年に一度の存在。この子はまだ生まれて間もない子。だけど、あなたを主とした。

精霊には親が居ない。精霊は、自然に溢れる魔力から生まれる生物だ。ガウウと足元でなく、この獣もそういう存在らしい。

霊獣は、契約を魂に刻み込まれている。その仕方も、何れそれをしなければいけないという事も。

契約の獣。そう呼ばれるのは、彼の者が現れると言う事は、契約者が必ずいるという事らしい。契約する事を、魂に刻み込まれた存在。気にいった人間と契約を結びし、存在。

「……………」

いまいち実感がわかない。この獣が、ベッドの隣でただくつろいでいる無害そうな獣が、そんな存在だという事実…。実感がわからないのもきつと無理はない。

この子に名前を付けてあげて。

精霊の言葉に、私は頷き、考える。この獣に相応しい名前は何だ

るうか？ この子には家族が居ない。それなら、契約者である私が、この子の家族だ。そして、名前は重要なものであるし、どうしようか、正直悩む。

私は獣をじつと見つめた。ガウウと鳴きながら尻尾を振っている獣、私の初めての使い魔。

「ラティ。この子の名は、ラティ」

私がそう言えば、ラティは嬉しそうにガウガウと鳴いた。

それから、私が目覚めた事に気付いたお兄様やクロ達が、心配したようにやってきた。

「アリア、大丈夫なの？」

クロが心配そうに眉をひそめて聞いた。相変わらず女顔のクロにそんな表情をされるとなにか悪い事をこっちがしたような気分になった。

お兄様だつて、皆心配してくれた。私の事を心配して、声をかけてくれた。前世では、家族仲はあんまりよくなかったから、こういう心配が私は嬉しい。何だか胸が熱くなるのを感じた。

「…そうだ、アリア。レッドベアが何故あそこにいたか、わからないんだ」

お兄様はそう言った。

レッドベアは本来、あの森に生息するような魔物ではないらしい。それは私も事前の説明で聞いていた。レッドベアが出たという事で、課外学習は途中で中止になった。今はギルドや王国騎士団の人間が、森を調べているらしい。

「それで、アリア。その獣はどうしたの？」

「あーっと、何か契約しちゃった成り行きで」

「え！？」

クロがそう言って、私を驚いたように見てくる。私も目が覚めて契約したって精霊に聞いた時びっくりしたんだよね。

それから、私はお兄様とクロに霊獣という存在と使い魔の事や、

精霊が視える事、術式が視える事を話した。人に話すのは初めてだったけど、お兄様とクロなら、信用できるから。

もちろん、お兄様もクロも驚いたような顔をして、信じられないものを見るように私を見ていた。それだけ、霊獣って存在は珍しくて、使い魔契約を結ぶという事は珍しい事なのだ。

そうして私は初めての使い魔を得たのだった。

霊獣という存在（変更あり）（後書き）

獣の正体こんな感じで納得してもらえるかな？と思う作者です。
お気に入り数200突破！

寮の自室にて。(前書き)

とりあえず、お気に入り数がどんどん増えているのが、嬉しくてたまりません。ちょっと短いです。

寮の自室にて。

「ガウウウウ」

ラティが、私の足元で鳴いた。

私は今、寮の自室に居る。

学園長に使い魔についての報告をして、霊獣という存在についての資料を見せてもらえないかと交渉を試みた。そうすれば、学園長はそれを私に渡してくれた。

使い魔は、契約者と血の契約により、結ばれている。

前世の小説でいう、「召喚」のような行為が出来るのだ。まあ、いつてしまえば何処にしようと、離れていようと使い魔は契約者のもとにやってこれるようになっていたらしい。

ラティは私の部屋からほとんど出していない。

なるべく、大勢の人にラティを知られるべきではない、と判断したからである。そもそも使い魔をもてるかどうかは、才能にもよる元からどれだけ、視える目を持っているか、とか、魔物の声を聞ける耳を持っているか、とか、そういう、才能。

私には、そういう視る才能があった、という事だ。

「ラティ」

名前を呼べば、子犬のように小さなラティは私にじゃれつくように、足に頭を寄せてくる。

何だか、口元が緩む。使い魔、初めての使い魔。契約を交わした、存在。嬉しいと心から思う。前世で、そういう世界にあこがれてた私は、今使い魔を得たのだ。

それが、どうしようもなくうれしくて、たまらない。

ファンタジー小説。その世界に、ファンタジー溢れる世界に私は居て、こうして生きている。

この世界に生まれおちて、もう八年目。この世界の住人として私はすっかりなじんでいるのだからうけれども、それでも、前世の事を

考えると不思議な気分になる。

前世の私はただ普通に生きて、普通に死んだ。

どうして記憶を持ったまま、この世界に生まれおちたか、何てわからないけど、この世界に生まれさせてくれた存在に感謝したい。神様なんて信じていない。というか、未来なんて自分が決めるものだし、でも感謝しようと思った。

私には見る才能がある、精霊達とだって、言葉を交わせる。ラテイのような特別な存在だって、見える。

それなら、可能性が出来る。

使い魔契約は互いが承諾しないと出来ないもの。今回はラテイが私の魔力を気にいってくれたからこそ、できたもの。

使い魔契約の本とか読んでみて思ったんだけど、使い魔になれるような存在って結構強い魔物が多い。使い魔を持っている存在についての文献も読んでみたのだけれども、強さで圧倒して認められるパターンも多いみたい。

なら、強くなってみせよう。魔物が溢れる世界を、冒険できくらい強く。

ファンタジー世界は、前世のようにテレビとかがあるわけじゃないから、離れた場所の事はあんまり情報に入ってこないものだ。それに写真だってない。自分で自分で見に行きたい。色んな場所を。

それに未知の場所にいける、だなんて興奮してならない事だ。

「ガウウウ」

考えことをしていれば、ラテイが鳴いた。

どうやら、お腹がすいたらしい。霊獣は魔力を食べる存在。だから、すぐに魔力を消費してしまう。食べ過ぎてもらったら困るから、ちゃんとラテイに食べ過ぎないようにいってもらって食べてもらう。

「ガウウ」

と、ラテイが鳴いて、魔力を食らった瞬間どつと、疲れが来る。

もっと私に魔力があれば楽なんだろうけれども、と思って、魔力を増やそうと思わず決意する。

私はこの国で権力を持つ、貴族の娘だ。だけれども、冒険に出たいと思ってしまう。普通は貴族の娘って、結婚してそれで夫人やるものなんだけれども、私は冒険したいと思ってしまう。

ギルドに、所属したりとか、して旅をしたい。

そんな事お母様達にまだ言った事はないけれど、はやいうちに言ってみようと思ってる。大きくなったら、結婚の話とかお母様達はしてくるだろうし。

「もし、旅に出る事になったら、一緒に行こうね、ラティ」

私がそう言っただけでラティの頭をなでれば、ラティは嬉しそうにガウウと鳴いた。

お兄様の思い人

三学年、秋。

あの課外学習から、数か月たったある日の事。

私とクロは演習場で魔法の練習をしていた。私は旅に出る、という目的があつて、だからこそ、強くなりたいと望んだ。

何でクロに強くなりたいかかって聞いたら、”アリアが強くなつてから”とか、わけのわからない事をいわれて私は思わず首をかしげた。

クロはわけのわからない様子の私を見て、ただ笑つただけだった。まあ、そういうわけで、特訓をしていたわけである。ちなみに言うと私は武器も色々手を出している。ミインは剣術だけ。

週末になると、私はラテイの散歩がてらに学園の外に出たりと、結構忙しい日常を送っている。ちなみに結構これは足腰とか鍛えられる。ラテイは自然の中を好む。霊獣っていうのは、どっちかって言うと存在でいったら、精霊の方が近いらしい。だから、精霊が居る場所を特に好むんだとか。それで自然の中について、ラテイと一緒に動きまわるわけで、結構体力つくんだよね。

「アリア、ネル兄がいるよ」

クロが、突然、そんな声をあげた。

お兄様が、と私がそちらを見れば、お兄様が小柄な少女と演習室に入ってくる所だった。

何処までも優しそうに、愛おしそうに少女を見つめるお兄様。何だか、そんな視線にピンツと来た。ああ、あの子が、パーティーのときにお兄様のお友達がいつていた、お兄様の思い人か、と。

黒髪の髪を肩までなびかせた少女。可愛らしく、少女は微笑む。少女が笑えばお兄様も笑つて、何だか見ていてほほえましい気持ちになつた。

「お兄様っ」

私が声をかければ、お兄様はこちらに気付いて振り向いた。

「アリアに、クロ!?」

お兄様はこちらを見て、驚いたような表情を浮かべていた。隣で微笑んでいた少女もこちらを真つすぐ見ている。

「ネルの、妹?」

そうして聞こえてきた声は、どうしようもなく可愛らしい声だった。

「ああ。俺の妹のアリアと、うちの家に住んでるクロだ」

「よろしくお願いします。アリアです！」

リルア・ルースルト先輩ですよね」

「え、何で私の名前……」

「お兄様のお友達がいつてましたの！ だから私リルア先輩と話してみたかったです」

お兄様の思い人って事は、未来のお姉様になる事もあるわけで…、それなら仲良くならなきゃと思っただしね。

「そうなの。よろしくね、アリアちゃんに、クロ君」

につこりとリルア先輩が笑った。

お兄様はこういう笑顔にやられたのかもしれない、と私は思う。

何だか人を元気にさせるような、そんな笑顔だったから。

それから、私たちはリルア先輩とお兄様と昼食を食べる事となった。

食堂に入って、メニューを注文する。

異世界っていつても、この国は私が住んでいた日本のように四季が来る。結構前世と似たようなメニューが並んでいるものである。

とはいっても他の国には、常に雪におおわれているとか、砂漠地域とかもあるんだけども。

「お兄様、私、この鳥の丸焼きにします」

「じゃあ、俺は」

まあ、そんな感じでメニユーを決めました。

とりあえず、メニユーが来るまでの間にリルア先輩と話そうと思
つて、私はリルア先輩の方を向き直る。

「リルア先輩、お兄様とよく会うんですか？」

「うん。ネルとはお友達だから」

そんな風にリルア先輩は可愛らしい笑顔で笑った。お兄様の方を
ちらりと横目で見れば、お兄様が心なしか微妙に落ち込んでい
るうに見える。

お兄様は、リルア先輩の事、本当に好きなんだなあ、って何だか
口元が緩みそうになった。

「そうなんですか」

それにしても、お兄様は告白すればいいのに、と思う。

身内びいきかもしれないが、お兄様は美少年という奴だ。クライ
ス姉もいつてたけど、お兄様はもてるみたいだし。見た感じ、リル
ア先輩はお兄様に嫌悪感とかそういうのはないみたいで、普通に仲
良いみたいなのに。

そもそも、あのパーティーの時に告白しようと思気込んでいると
エル先輩がいつてた気がするんだけど。結局告白出来てないって、
お兄様はヘタレなのかな、と思ってしまう。

「ネル兄、今日は何でリルア先輩と一緒に居たの？」

「…リルアが、魔法教えてっていったから」

「へえ、そうなんだ」

お兄様とクロクがそうやって会話を交わしているのが、聞こえてく
る。

魔法を教えるっていう口実の下、リルア先輩のそばにいて、き
つとお兄様は嬉しいんだろうな、って思ったり。

前世の私って、丁度彼氏に振られて、事故にあって死んだんだよ
なあ、と昔を思い出してみる。前世の私、まだ十代で、その彼氏の
事も今思えば恋に恋してた、そんな気もする。

「お兄様」

私は笑って、お兄様に声をかける。

「なんだ？」

「リルア先輩の事、頑張ってるね」

リルア先輩に聞こえないような小さな声で呟けば、お兄様は、
「善処する」とただそれだけいったのであった。

でも本当リルア先輩が義姉様になるのは、いい事だと思う。

お兄様の思い人（後書き）

遅れてしまつて、申し訳ないです。
最近忙しかったので…

冬の日に出会ったのは。

冬が来た。雪が地面に降り注いでいる。とはいっても、私が住んでる地域はそこまで雪が積もるような地域ではないのだけれども。けれども、積もるときは少しは積もる。

こっちの世界にも雪遊びとかあるから、毎年この時期になると、雪合戦とか色んな事をして私はクロと遊んでいる。

冬休みは私とクロは実家に帰っていた。というのも、お父様とお母様に帰ってくるように言われたからであるけれども。そういえば、お兄様も帰るように言われていたようで、お兄様も一緒だ。

私とクロは今、私の自室でのんびりと過ごしていた。

ふかふかの真っ白なベッドに座って、二人して、会話を交わす。

私の部屋は基本的に白一色で染まってる。本棚にはいくつもの本が並べられており、私の足元には、ラティが居る。

「何の用だろうね、アリア」

「さあ？」

前世の記憶があるからか、自分がお嬢様って感じは本当はあんまりしないのだけれども、うちの家はこの国では相当な位にある。私はまだ子供だけれども、そのうちもつと権力とかそういうのが絡んだ世界を見る事になるのだろう、と思う。

正直そういうのはあんまり好きじゃないけれど、こういうファンタジー世界で、お金持ちの家に生まれかわる事が出来たのは幸いだっただと思う。この世界と前の世界じゃ便利さが違う。

この世界じゃ、貧困なものは飢え死にする事だっただけである。この世界じゃ、本だってお金を持っていきなきゃ手に入らない。

前の世界じゃ、というより、私が前住んでいた日本では当たり前のように食べ物売ってあって、当たり前のように本を買う事が出来た。生まれも育ちも日本だったし、食べ物などで困る、なんていう事は前世ではなかった。

「ガウウウ」

足元でラテイが、鳴き声をあげる。尻尾が揺れていて、何だかそれを見て、笑みがこぼれた。

「アリア様、クロ、奥様がおよびです」

メイドさんがそういって、私たちを呼びにきてくれた。私とクロがベッドから立ち上がったって、そうして、歩き出せば、後ろからラテイも追いかけてくる。

ラテイの頭を軽く撫でた。そうすればラテイは嬉しそうに鳴き声を上げる。

階段を下りて、リビングへと向かえば、お父様とお母様、そして、お兄様に、知らない、二人の男女が居た。

両方ともおそらく30歳前後ぐらいだろう。男の人は、栗色の少しパーマがかかった髪で、女の人は綺麗な金髪だった。外見から見て、貴族といった感じではない。

机を囲むようにして存在する四つのソファ。そのソファの一つにお父様とお母様が座り、その真正面にその男女が座っている。お兄様は、お母様達の右側の席に腰掛けており、私とクロはお兄様の真正面の席に座るように言われ、腰掛ける。

「ああ、アリア、クロ。紹介しよう。この二人は私の古い友人だ」
お父様が、そう口にして、二人の事を紹介してくれる。

男の名は、ハウア・オーネンス。女の名は、ミラン・オーネンス。
二人は夫婦だそうだ。そうして、その男の人は、

「まさか、それは霊獣ですか!？」

ラテイを見て、驚いたような、興奮したような声をあげたのだ。
お父様が、それに頷いて、そうして、言う。

「ああ、そうだ。ハウア。今回君を呼んだのはこの霊獣の事なんだ。使い魔について詳しい、君ならこのラテイについて、詳しく教えてくれると思うてな」

どうやら、彼は使い魔に詳しい人間らしい。

冬の日、お父様に紹介されたのは、使い魔に詳しい人間だった。

霊獣は、稀にしか現れない存在。だからこそ、この人を家に呼んだのだろう。

私も、お話を聞きたい。ラティについて、私はそこまで、詳しいわけではないから。

だから、喜んでその人を歓迎した。

冬の日に出会ったのは。(後書き)

遅くなって申し訳ありません…。

沢山のお話を聞いた。

ハウア・オーネンス。

その人は私に沢山のお話を話してくれた。

霊獣、その存在についての研究も彼は行っていたらしく、だからこそ、彼は私にいつも興奮したように話しかけていた。

霊獣を、この目で見れるとは思えなかった。

そういつて、感激したようにラティに触れる彼を見ながら、思わず私は苦笑してしまったものだった。

彼は、霊獣についてのレポートを書いてくれた。

一気に説明しても覚えられないかもだろ？　そういいながらわざわざ紙に書いてくれたのだ。この世界じゃ印刷技術なんてもの、そこまで発展はしていないのに。

使い魔についても私が興味があると言えば、沢山のお話をしてくれた。

ハウアさんは、耳で精霊を感じとれる、らしい。要するに目で見る事は叶わないけど、声だけなら聞こえるようである。そういう人もいるのだと、初めてしつた。

私は一応見えるし聞こえるけど、それは誰にもなんとなく言っていない事だから、言わなくていいかなってそういう気分になって言わなかった。

「突然、精霊の声が聞こえるって、びっくりしませんか？」

そう、聞いてみた事がある。

それに対して、ハウアさんは笑って答えた。

「いや、僕の住んでいた所は田舎でね。森が近くて、沢山の精霊が周りにいたんだ。だから、僕は赤ちゃんの頃から精霊の声を聞いていて、精霊達も自己紹介をしてくれていたし、まったく驚かなかったかな。でも、幼い頃は周りの人間が精霊が居るのに認知していない事に凄く驚いた」

そういう、事が、と私は思う。

私が住んでいるのは、町の中。それも大都市の中。私の家は、世間的にいう大貴族。

精霊は自然を好むと言われているし、このあたりにはあんまり居ないのだろう。それにしても、赤ちゃんの頃から精霊の声を聞いていたなんて、凄いと純粹に思う。

「冒険って、どんな感じですか？」

使い魔の事だけじゃない。折角世界を旅しているハウアさんに出会ったのだから、色々興味のある事を聞いておきたかった。私は、所詮、この家からほとんど出た事のない、箱入りお嬢様だ。

冒険をしたって、そんな夢を私は見ているけれども、そのためには沢山の知識とか、生きていくための術がいる。

私も別に前世の時代からの憧れを、そのまま夢見てるわけじゃない。冒険をするって事はそれだけ危険な事が沢山あるのだと思うから。でも、それでも、前世の世界で夢見たファンタジー世界に折角きているのだ。

前の世界では、未知の世界がないといっているほどに、世界中のあらゆる所を人間がみつুকしていた。パソコンで検索すれば、すぐにそういう映像は映し出されるし、調べれば行かなくてもわかる、そこがどういう場所なのか、理解できる。そういう、感じだった。

私は、未知の場所って怖いと思うけれども、それ以上に興味があるのだ。誰も行った事のないような、誰も見た事のないような場所を見に行く。それって、どうしようもなく、わくわくする事だと私は思っている。

「色々な場所を見に行つて、見た事もない動物を見たり、そういうのは楽しいが、危険だ」

「そうですね。冒険する時って」

私は興味がある事をどんどん聞いた。未来で、私がどんなふうになつているかとか全然わからないけれども、行けたら、私は冒険に行きたいから。

ハウアさんから、沢山のお話を聞いて、私は部屋に戻った。ラテイが気持ちよさそうに用意させたベッドで眠っていて、それを見ながら、私は霊獣についてのレポートを読む。

霊獣は、魔力を食べて成長する生物であり、前に見たように一定期間のみ体の大きさを巨大化させる事も可能らしい。霊獣という存在は、契約者の魔力に影響されて、成長するものであるらしい。だから、霊獣の姿は正直いって、成長した後は様々なものなんだとか。人の魔力というものは、一人一人性質が異なっているものである。私は自分の魔力がどういうものなのか、まだいまだにわからないが、中等部に入学したら魔力検査とかそういうものもあるらしい。

霊獣は貴重で、滅多に存在しない種族であり、何億もお金を出してでも欲しがらる人間はいるらしい。とはいっても、霊獣は一度契約者と決めたらその契約者が死ぬまで契約を切る事は出来ず、契約者の言う事に忠実な存在であるらしい。ちなみに、契約者が死んだ場合はまた、私が最初見た時のように普通の人には姿が見えなくなるらしいのだ。

霊獣というのは、要するに精霊たちを視るか、声を聞く、そういうものがないと存在を確認できないものであるらしい。霊獣の本能には、気にいった人間には姿を現し、契約するというのが刻み込まれているのか、大人になってから気にいった人間がいれば、その人間の前にだけ姿を現すんだとか。

霊獣については、いまだに未知数で、わからない事が多いんだとか。

私は眠っているラテイへと視線を向ける。眠っているラテイは本当に可愛くて、そういう特別な存在とはあまり思えない。でも、ラ

ティはそういう、滅多にいない存在なのだ。

もしかしたら誰かに私はラティの事で狙われるようになるかもしれない。

そうになったら、ラティを取られないように、自分の身を守れるように、私はもつと強くならなきゃだと思ふ。そういえば、貴族の子供には私ぐらいの年でも婚約者がいる子が普通に居る。私は正直、そういうのはいやだなあと思ふ。

前世の感覚があるからか、お見合いとか、政略結婚的なのはちょっと…、と思ふ。もし結婚とかするなら恋愛結婚がいいなあ、と思ふのは貴族に生まれた娘として駄目かもしれないし、我儘かもしれないけど、それでも嫌だな、と思ふ。

それに、婚約者とかいずれ出来るとしたら冒険に出たいっていう私の夢を完璧にあきらめなきゃいけない事になる。貴族の、貴婦人というものは、そうやって冒険してはいけないものである。子供を生まなきゃいけない、そういう使命も出来てくるわけだし…。

お母様とお父様も家同士の政略結婚だったらしい。とはいっても後から愛情が芽生えたらしく、私から見てもラブラブだけでも、やっぱり、貴族の中には身分の低い女の人に手を出している人とか、愛情とか全くないとかもあるものだ。

私は、そういうのは、嫌だなと思ふ。前世では家族と仲良かったわけではない。寧ろ家族が嫌だとさえ、思っていた。だから、現世で優しい家族がいて、凄く嬉しかった。前世みたいな、家庭を築くのは私は嫌だ。

私が、もう少し大きくなったらそういう結婚話はきくと舞い込んでくる、その時は…、どうするか、考えなければ。

私はそんな事を考えながら、ベッドに横になって、そのまま眠りについた。

部屋にて、やっぱり、冒険したいと望む。(前書き)

まだ冬休みです。

ひたすらARIAが冒険したい願望を胸に色々考えてるだけです。

部屋にて、やっぱり、冒険したいと望む。

ベッドの上に横たわりながら、ラテイの頭を軽く撫でる。そうすれば、ラテイは気持ちよさそうに鳴いた。

ガウウウ、と初めてあつた時のように鳴き声を響かせる。

死ぬまで途切れる事のない、契約。それが、私とラテイの間で交わされている。霊獣について説明してくれた精霊さん達は、”まだ意思疎通はできないと”っていた。もう少しラテイが成長したら、意思疎通ができるのだろう、とそうおもう。

前世で、私はファンタジー世界にひどく憧れていた。物語の世界が好きだった。生き生きとした登場人物たちを見れば、元気になれた。ファンタジー世界には夢がある、と私は思う。魔法っていう力があつて、使い魔っていう絆があつて、前世の世界より居心地がいい。

主に私が読んでいたのはライトノベルばかりだったけど、物語を読んだら世界が広がる、そんな気分になった。現実は物語のように綺麗には終わらないとか、そういう事はわかつてるけど、やっぱり、冒険したいと思う。

つらい事があるだろうけど、大変だろうけど、それでも、自分の目で世界を見てみたい。誰も行った事のないような未知の場所についてみたい。そう、願って仕方がない。

現世ではどんなに山奥の写真だろうと、ネットにupされてたり、そうして知る事が出来た。でもこの世界じゃ、情報だって簡単には回らないし、未知の場所が沢山あるのだ。それを思うだけで、わくわくしてならない。

色々な場所をこの目で見て、色々な人と交流して、そうして、冒険しながら生きていくって素晴らしい事だと思う。前世で貴族階級っていう、餓死などとは無縁な地位に生まれた事は嬉しいと思うけど、正直貴族の子女として生き、後に貴族の婦人として、煌びやか

な生活を送るなんて嫌だと思う。

そんなの、つまらないってそうおもってしまつから。折角の第二の人生なんだから、できれば思いつきり、冒険したいなと思う。前世の記憶を持ったまま、生まれ変わるなんていう奇跡が起きてくれたんだから。

私はこの世界について知らない。どんな場所があるのかも、詳しく知らない。魔法とかについては学んできてるけど、もっとこの国の事とか、他の国の事とかも知りたいって思う。

前世で勉強はそこまで好きじゃなかったけど、此処がファンタジー世界だつておもうだけで、勉強が好きになれる気がする。

今まで図書室で、魔法や使い魔などの本ばかり借りて読んでたから、休みあけからもっと他のものも読もう、と思った。

前世で、天使より悪魔が好きだった。神より魔王の方が好きだった。聖獣より魔獣の方が好きだった。何故か、何て自分でもわからないけど、そういうのが出てくるお話が好きだった。

前世の頃からファンタジー世界にあこがれて夢見て、冒険出来たらしたいとかアホな妄想してた私。この世界に生まれおちて、九年。こつちの世界にももうすっかり慣れてしまったし、お兄様、お父様、お母様なんていう呼び方にももう慣れた。魔法があるのが当たり前になつたし、前世の記憶は少しずつ薄れていつているようなそんな感じなのかもしれない。

この世界には誰にも知られないようにひっそりと暮らしている一族とかいるんだろうか、いたらいいなと思う。誰も知らないような生物がひっそりと何処かで暮らしているかもしれない。

町から町を行き来して、世界中を旅している職業といえば、商人とか、冒険者とか、あと研究家とかだろうか。やっぱり、冒険するならギルドだよな、なんて思ってしまうのはきつと前世で読んだ携帯小説に影響されているからだ。

二つ名なんて厨二っぽいものもこの世界にはあるのかな？ ギルドについても調べてみたいな、どんな人がいるのか。でも実際に自

分につけられたらきつとはずかしいんだろうなあそういうのって、なんて思う。

そういえば、この世界には人魚がいるらしいって、この前授業でいった。人魚ってどういう暮らししてるんだろうか？ 海の中に存在する人魚の町とかそういうのあるのかな？

それとも空とか、空中に浮かぶ島とか存在して、人が暮らしていたら凄く面白いよね。あと、地底人とか。

大体ファンタジー世界って国によって常識とかも色々違うからなあ、やっぱり色々な国行きたい。そのためには今家でも少しずつ習ってる他国の言語についてもちゃんと勉強しようと思う。

ふと気になる事はこの世界って米みたいな食べ物あるのかなって事だ。私の住んでる周辺は本当、西洋で中世みたいな感じの、そういう食事が出てくる。白ご飯食べたいなあ、なんて願望が出てくる。今度調べてみようかな。

私、ファンタジー小説で、二人組の相棒とか、凄く好きだったんだよなあと思います。互いに信頼し合って二人で旅をしながら色々巻き込まれていくとか、そういう感じって凄くいいと思う。

その日はずっと、そうやって冒険にかける思いを考えていた。気付いた時には結構な時間がたっていたっていう。私だけでなく、妄想してたんだろう…。

部屋にて、やっぱり、冒険したいと望む。(後書き)

最近微妙に気分が沈んでるので、面白い小説探しています。
基本的に面白い物語読めばテンションあがるので、私。

・転生

・側室

・脇役

・秘密持ち

とかそつち系とか、巻き込まれ系とか好きです。

面白い小説、あったらお勧めしてくださいだされば嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1828t/>

転生しちゃいました。

2012年1月2日15時02分発行